



第三卷第二十號



# 謹告

本誌は、婦人教育及家庭教育、其他緊要なる各種の問題に關して、讀者相互の質疑應答を掲載す、但讀者の應答なき時は、記者之に應ずるものとす。

本誌は一般讀者の寄稿を歡迎す。殊に家庭の日誌、各地に於ける婦人教育幼兒保育の狀態、婦人問題、婦人兒童の遊戲、手毬歌、子守歌等に付きては、詳細なる報告を望む。但質疑投稿は、凡べて左の規則によることとす。

- 一、用紙は、白紙二つ折、字詰は、半枚十行廿二字詰、體は楷書。
- 一、一事項毎に別紙を用ひ、別口に住所氏名を記入せらるべきこと。
- 一、原稿は、一切返附せざることを。
- 一、封書の表には、凡て婦人子ども投稿と明記せらるべし。
- 一、投稿にして、有益と認めたる時は相當の謝意を表することあるべし。
- 一、照回は往復はがき又は返信用切手封入のこと。

# 會告

本會に御入會なされんとする方は、會則にある通り會費は一ヶ月金拾錢ですから、其割合で女子高等師範學校附屬幼稚園内フレーベル會へ向け何ヶ月分か纏めてお納めの上、申込まれると、雜誌は當會から無代價で御送附します。會員にならないで、たい雜誌だけ買つて御讀みになりたい方は、日本橋區本石町三ノ廿三金昌堂へ御注文下さい、一冊拾錢六冊前金五拾七錢十二冊前金一圓拾錢他に郵税が一冊一錢づゝの割合です。

明治三十六年十二月二日印刷  
同 年十二月五日發行

不許  
複製

發行所 東京市本郷區元町二丁目六十六番地  
編輯者 東京市江崎町一丁目十九番地  
印刷所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地  
印刷所 東京市神田區錦町三丁目二十五番地  
發行所 女子高等師範學校附屬幼稚園内  
發行所 東京市日本橋區本石町三丁目廿三番地  
發賣所 金昌堂

大賣捌所 東京 東京堂●同東海信文合資會社●同北隆館

婦人と子ども第參卷第拾貳號目次

子ども

運野四九内	.....	やまとの翁
いとつぶ物語	.....	記 者
室内遊戯	.....	記 者
英語一口はなし	.....	ゆ き 子
前號考へ物の答	.....	
この次の考へ物	.....	

家庭

吾人身体上の悲觀	.....	寺 田 勇 吉
今いろは料理	.....	石 井 泰 次 郎

學術

兒童心理	.....	松 本 孝 次 郎
奇妙なる動植物	.....	田 寺 寛 次

史 傳

黑澤登幾子傳補遺	.....	下 村 三 四 吉
----------	-------	-----------

文 苑

水仙花	.....	雨 峰 生 譯
御苑の菊	.....	東 く め 子
孝女	.....	つ ね を

説 林

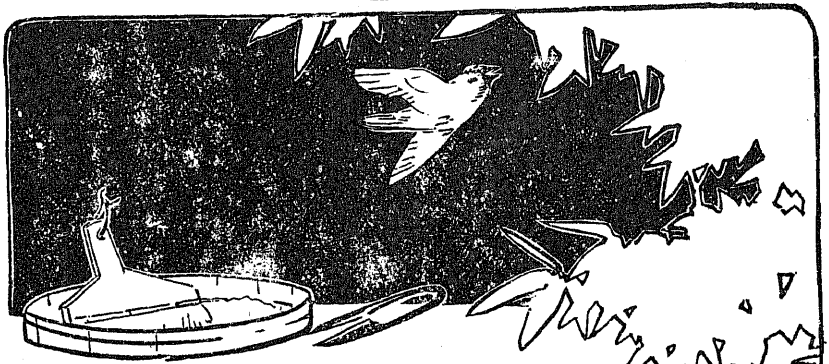
幼稚園の立場と其務	.....	森 岡 常 藏
-----------	-------	---------

雜 錄

鹽津みやげ	.....	和 歌 子
きつす	.....	や 子
友の日記をよみて	.....	天 骨 老 人

彙 報

女子高等師範學校●公益音楽會●新年歌御會始御題●本會忘年會  
●兵庫縣通信●會報



# もど子と人婦

## 號貳拾第卷參第

### 運野四九内

(ついで)

やまとの翁

そこで、四九内は、其不思議の劍  
をお姫様に頂きましたので、厚く  
お禮を申し上げて、さて其お屋敷  
をで、お隣りの國の天子様の所  
へ急いで行きました。

所が、お隣りの國では、今合戦の

最中で、天子様は敵軍の爲に、ひどく苦しめられて居る所なんです。そこへ、四九内が行って、天子様に「此敵は、私が引き受けて、うち負かして上げましょー」と、申し上げたので、天子様は、大變にお喜びになつて『戦争の事は、一切四九内に任せるから、どうか、敵を追ひ退けてくれ』といつて、お頼みになりました。

そこで、四九内は、かの劍を腰にさいて、一人の家來も引きつれず、たった一人きりで、敵の陣へ押しかけて行きました。すると敵の大將軍は馬に乗つて、大勢の軍勢を引きつれて、出て來ました。が四九内が、たった一人で立つて居るのを見て、『なんだ此野郎！、一人で何と思つて來たのか』と思ひながら、馬を

飛ばせて進んで来ようとする所を、待ちまうけた四九内は、いきなり其劔を抜いて、四方八方に振り廻はした、すると不思議にも、敵の大將軍は、忽ち馬から落ちて死んで仕舞つたし、ついで居た軍勢ども、残らずバタ／＼と斃れて仕舞ひました。天子様は家來どもと一所に、遠くから四九内の働きを御覧になつて居つて、ひどく感心して、夫から四九内をつれて歸つて、澤山に御褒美を下すつて其上に、雪姫といふたつた一人のお姫様までも下さいました。

所が敵の方では、折角勝ちかゝつて居た所を四九内の爲めに、負けて仕舞つたので、ひどく残念に思つてどうかしてこの四九内をない者にしたいと、いろ／＼考へた末、とう／＼廻はし者

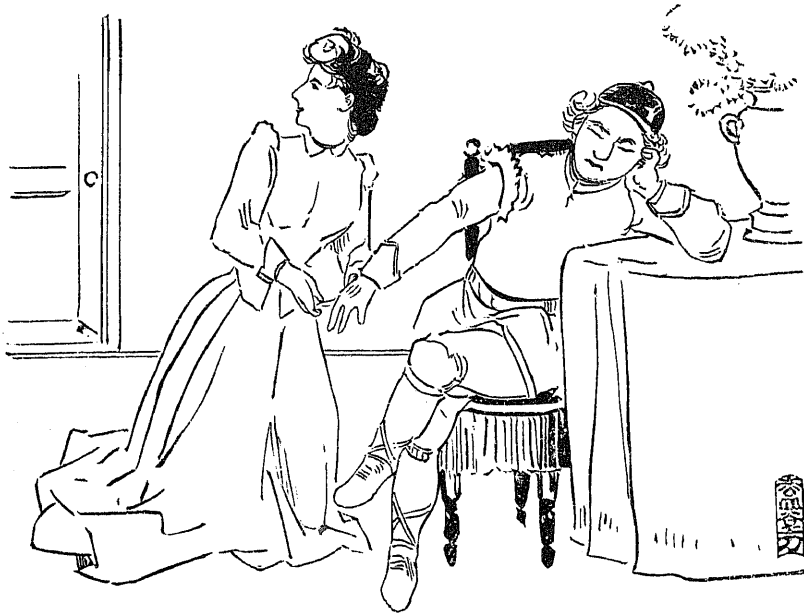
を使つて、雪姫を味方につけて、四九内を殺そうとしました。

そこで、其廻はし者が、雪姫に相談して、四九内の不思議の力が、どこにあるのかといふことを見付けだして、夫から、其力を取つて仕舞つて、其後でうまくと四九内を殺して仕舞はうといふことに決めました。

そこで、或日のこと、雪姫は、何も知らぬ顔で、四九内に申しました。

『あなた、此間、あないな大勢の敵をうち亡ぼしなすつた不思議の力を、どうしておもちになつて居ます』

すると四九内は、『夫はね』といつて、言ひかけてから、はつと氣がついて、そうく七年の間は、誰にもいってはいけな



だっ ったと思ひ直して、

『其力そのちからかい、僕ぼくの力ちからはね、そ

だ この手袋てぶくろの中なかにあるのだよ』

と言ひました。

そこで、雪姫ゆきひめは、さてはと思つ

て、或晩あるばん 四九内よくいちのよく寝て居

る時ときに、そーと、手袋てぶくろを盗ぬすん

で仕舞しまつて、さて、敵てきの方はうへ其

事を言つてやりました。

敵てきは、其事そのことを聞きいて、大變たいへんに喜

んで、夫それならばもう大丈夫だいじょうぶだと



思<sup>おも</sup>つて、其<sup>その</sup>次<sup>つぎ</sup>の日<sup>ひ</sup> 四<sup>よ</sup>九<sup>く</sup>内<sup>ない</sup>が馬<sup>うま</sup>に<sup>の</sup>乗<sup>の</sup>つて出<sup>で</sup>て來<sup>き</sup>た所<sup>ところ</sup>を 大<sup>お</sup>勢<sup>せ</sup>が  
待<sup>まち</sup>ち伏<sup>ふ</sup>せを<sup>を</sup>して、斬<sup>き</sup>り殺<sup>ころ</sup>さうと<sup>と</sup>した所<sup>ところ</sup>が、四<sup>よ</sup>九<sup>く</sup>内<sup>ない</sup>は平<sup>へい</sup>氣<sup>き</sup>な<sup>な</sup>もの  
で、彼<sup>か</sup>の劍<sup>けん</sup>を抜<sup>ぬ</sup>いて振<sup>ふ</sup>り廻<sup>ま</sup>はしたから、堪<sup>たま</sup>らない<sup>い</sup>みんな、ばた  
く<sup>く</sup>と斃<sup>たを</sup>れて仕<sup>し</sup>舞<sup>ま</sup>つた。

之<sup>これ</sup>ではい<sup>い</sup>かぬとい<sup>い</sup>ふので、雪<sup>ゆき</sup>姫<sup>ひめ</sup>は 又<sup>また</sup>四<sup>よ</sup>九<sup>く</sup>内<sup>ない</sup>に尋<sup>たづ</sup>ね<sup>ね</sup>ま<sup>ま</sup>した。

『ねーあ<sup>あ</sup>なた、まーあ<sup>あ</sup>の<sup>う</sup>様<sup>さま</sup>な不<sup>ふ</sup>思<sup>し</sup>儀<sup>ぎ</sup>な<sup>な</sup>力<sup>ちから</sup>が、あ<sup>あ</sup>なたの<sup>の</sup>ど<sup>ど</sup>こに<sup>に</sup>居<sup>ゐ</sup>  
るの？

し<sup>し</sup>かし四<sup>よ</sup>九<sup>く</sup>内<sup>ない</sup>は中<sup>なか</sup>々<sup>く</sup>油<sup>ゆ</sup>斷<sup>だん</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>ない

『お<sup>お</sup>れの<sup>の</sup>力<sup>ちから</sup>か 夫<sup>それ</sup>はね、を<sup>を</sup>れの<sup>の</sup>長<sup>なが</sup>靴<sup>ぐつ</sup>の中<sup>なか</sup>に<sup>に</sup>在<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>のだ』

さては<sup>は</sup>と思<sup>おも</sup>つて、雪<sup>ゆき</sup>姫<sup>ひめ</sup>は、ま<sup>ま</sup>たそ<sup>そ</sup>ーと四<sup>よ</sup>九<sup>く</sup>内<sup>ない</sup>の<sup>の</sup>長<sup>なが</sup>靴<sup>ぐつ</sup>を<sup>を</sup>盜<sup>ぬす</sup>んで  
さて敵<sup>てき</sup>に知<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>せてや<sup>や</sup>り<sup>り</sup>ま<sup>ま</sup>した。所<sup>ところ</sup>が敵<sup>てき</sup>の方<sup>かた</sup>では、今<sup>こん</sup>度<sup>ど</sup>こそは<sup>は</sup>と

思<sup>おも</sup>つて、又<sup>また</sup>待ち伏<sup>まちふせ</sup>をした所<sup>ところ</sup>が、またくあべこべにひどい目<sup>め</sup>に遭<sup>あ</sup>ひました。

そこで、雪<sup>ゆき</sup>姫<sup>ひめ</sup>は、又<sup>また</sup>四<sup>よ</sup>九<sup>く</sup>内<sup>ない</sup>に尋<sup>たず</sup>ねます。

「ねー、あなた、あの様<sup>よう</sup>な不<sup>ふ</sup>思<sup>し</sup>儀<sup>ぎ</sup>の力<sup>ちから</sup>が、一<sup>いち</sup>体<sup>たい</sup>どこにありますの？

四<sup>よ</sup>九<sup>く</sup>内<sup>ない</sup>は、もううるさくなつて來<sup>き</sup>て、

『はー面<sup>めん</sup>倒<sup>だう</sup>くさいな、れれの力<sup>ちから</sup>は、この劍<sup>けん</sup>の中<sup>なか</sup>の在<sup>あ</sup>るのだよ、この劍<sup>けん</sup>を持<sup>も</sup>つて居<sup>ゐ</sup>る以<sup>い</sup>上<sup>じょう</sup>は、誰<sup>たれ</sup>だつておれには叶<sup>かな</sup>はないさ』

四<sup>よ</sup>九<sup>く</sup>内<sup>ない</sup>は、とうく眞<sup>ほん</sup>實<sup>じつ</sup>の事<sup>こと</sup>を言<sup>い</sup>つて仕<sup>し</sup>舞<sup>ま</sup>ひました。そこで雪<sup>ゆき</sup>姫<sup>ひめ</sup>は、とうく其<sup>その</sup>劍<sup>けん</sup>を盗<sup>ぬす</sup>み出<sup>だ</sup>して、敵<sup>てき</sup>に渡<sup>わた</sup>してやると、敵<sup>てき</sup>は忽<sup>たちま</sup>ち四<sup>よ</sup>九<sup>く</sup>内<sup>ない</sup>をとつて押<sup>お</sup>へて、可<sup>か</sup>愛<sup>あい</sup>相<sup>そう</sup>にづだく<sup>づだく</sup>に四<sup>よ</sup>九<sup>く</sup>内<sup>ない</sup>を切<sup>き</sup>つて

仕舞<sup>し</sup>つて、さて其死骸<sup>しがい</sup>を袋<sup>ふくろ</sup>に入れて、夫<sup>それ</sup>を馬<sup>うま</sup>に積<sup>つ</sup>んで、追<sup>お</sup>ひ出<sup>だ</sup>して仕舞<sup>し</sup>ひました。

所<sup>ところ</sup>が、不思議<sup>ふしぎ</sup>なことには、其馬<sup>そのうま</sup>がどこともなく驅<sup>か</sup>けつて行<sup>い</sup>つてとうく彼の蛇姫<sup>へびめ</sup>の屋敷へ驅<sup>か</sup>けこんで行<sup>い</sup>きました。すると例<sup>れい</sup>の蛇姫<sup>へびめ</sup>が夫<sup>それ</sup>を見<sup>み</sup>て。

『おやく、四九内<sup>よくりない</sup>がまたくやりそこねたと見<sup>み</sup>えるよ』

といつて、其袋<sup>そのふくろ</sup>を下<sup>お</sup>ろして、きれくの死骸<sup>しがい</sup>を丁寧<sup>ていねい</sup>につぎ合<sup>あ</sup>せて、さて夫<sup>それ</sup>を治療<sup>ちりょう</sup>の水<sup>みづ</sup>で洗<sup>あら</sup>つて、つぎに又命<sup>またいのち</sup>の水<sup>みづ</sup>を吹<sup>ふ</sup>きかけた所<sup>ところ</sup>が、不思議<sup>ふしぎ</sup>にも、四九内<sup>よくりない</sup>は忽<sup>たちま</sup>ち生き返<sup>かへ</sup>つてすつくとそこに立<sup>た</sup>ち上<sup>あが</sup>りました。

蛇姫<sup>へびめ</sup>はにくしながら、

『言はないことか、七年の間誰にも話してならないと云ふ約束を守らないから、こんなひどい目に遭ったじゃないか、然し過ぎた事はしようがない、そこで、も一度、私はお前を天子様の方へ行かしてやるから』

といって、蛇姫は、鞭をもつて来て、四九内の脊中を打った所が、不思議や、忽ち立派な馬になって仕舞って、一聲高く嘶いて、天子様の國の方へ飛んで行きました。

所が、此方では、天子様は、左様なことゝは知らないで、或朝早く起きて見た所が、門の前に一匹の逞しい馬が立って居る。

『やゝ、これは見事な馬だ』といって、すぐ庭に連れて来て、あちらこちら乗って見て、夫から、雪姫を呼んで来て見せまし



た。

所が、雪姫は其馬を一目見た許りで、忽ち顔色を變へて、

『おや大變、お父さん、この馬は屹度、私の生命を取りますから、どうか、すぐ殺して仕舞って頂戴な』

と叫び出しました。

天子様は、夫を聞いて、不思議なことをいふと思ひましたが、大事のお姫様のいふ事だから、仕方がない、可愛相だと思ひながら、其馬を殺させる事となりました。

すると、一人の侍女が、夫を聞いて、いかにも可愛相でならない所から、馬の側に行つて、さまぐと慰めてやりました所が、馬も侍女の情に感おたと見えて、しきりに悲しげな聲をして侍

女の方を向いて嘶いて居ましたが、とうく家來どもの爲に殺されて仕舞ひました。

侍女は、どうにも不憫に思つて、其馬の血を取つて花園へ丁寧に埋めてやりました。

所が、不思議にも、其血を埋めた所から、まことに立派な櫻の木が一本生えて來た、其立派さといつたら、一枚一枚の葉が、皆金だの銀だのから出來て居て、花の咲いた所は、丸でダイヤモンドを并べた様です。

餘りの立派さに、天子様も驚いて、すぐ雪姫を呼んで見せました所が、雪姫は又一目見て、

『オや大變、此櫻は屹度私の生命を取るに違いない、どうかす

ぐと切つて仕舞つて頂戴』

と叫び出しました。天子様は

『まゝ、こんな見事な木を、どうして切つて仕舞へるものか』  
といつて見ましたが、何度もう雪姫がいつて已まないから、  
とうとうこれを切つて仕舞ふことにしました。

すると、あの侍女は、折角馬の血を埋めた所から生じて來た此  
櫻の木を切り倒してしまうことが、どうにも惜しくつて堪らな  
いので、そつと其花の一片を取つて、夫をお庭の池に投げま  
した所が、奇妙なことには、其花瓣が忽ち一羽の立派な鴨にな  
つて、池の中を、あちらこちらと、面白そゝに泳ぎ廻はつて居  
ます。



天子様は、夫を見て、『オや、奇麗な鴨だな』といつて丁度、夏の暑い時でしたから、自分も、いきなり裸體になつて池に飛び込んで、其鴨の行く方へ、行く方へと泳いで居ますと、鴨はだん



岸に上つて來た所が、四九内は、切り殺して仕舞ひました。

く岸の方へ泳いで來て、ひよいと、岸へ上つて天子様の脱ぎすてた衣服を着たと思ふと驚くべし、鴨だと思つたのが彼の四九内であつた。天子様は、夫とは知らないで忽ち夫と見て、刀を抜いて、

夫から、宮殿に歸つて、雪姫を呼ひ出して、『之は』と思つて驚く所を、之も全じく斬り殺して仕舞つて、さて、彼の侍女を召し出して、

『お前は、眞實に私の第二のおっ母さんだ、今からはおれの第二の妻にしよう』

といつて、夫からは、四九内が、此國の天子様になつて、いつまでもく二人で仲よく繁昌にくらしましたとさ。

めでたしく、

いそつぶ物語

其四十 吝嗇者

吝嗇者が、澤山に金を溜め込んで、何でも人の見ない所に置きたいと思つて、裏の壁に穴をあけて其中に入れて置いて、毎日／＼のぞいて見ては樂にして居りました。

所が、一人の惡漢が、毎日壁の穴をのぞいて居るのを見つけて、一体何してるのだらうと思つて、其吝嗇者の知らぬ間に、其穴の中を探して見て、とう／＼澤山な金を見出して、すっかり夫を盗んで行きました。

次の日に吝嗇者が来て、のぞいて見ると、金が一文もないので、さあ大變だといつて、大騒ぎをして探しにかゝりました。すると、隣りの人が来て、

其譯を聞いて見て夫から言ひまするは

『夫なら別にそう騒ぐにも及ばんじやないか、そこいらの石塊を持つてきて、れ金の代りに入れて置いて、夫をれ金じやと思つて居ればいゝじやないか、金が此處にあつた時だつて、使はなかつたのだから、石を入れたいも同じじやないか』

其四十一 仔豕と羊と山羊

一匹の仔豕が、羊だの山羊だのと、一所に小屋に入れました。所が或時に、番人がやつて来て其仔豕を捕へますと、さあ、仔豕が泣く、騒ぐ、暴れる、いかにも騒々しいので、羊と山羊とが側から「君、僕等も、時々彼の人に捕まるよ、然し僕等は一度もそんなに入笠しく騒いだ事はないよ」といふと、仔豕は答へて『だつて、君方の捕へ様と僕のととは、譯が違ふのだもの、君等の捕る

のは、たい、毛だの乳だの、爲だらう、所か僕を捕へるのは、命を取る爲だもの！

### 其四十二 自慢する人

或人が、方々の國々を歩いて、自分の國へ返つて來てから、大法螺を吹いて自慢をしました。其自慢話の中に、こういふことをいひました。『私は印度に行つて滞在つて居つた時、飛行術をやつて、印度人を吃驚させた。機械もなしに飛んだのだから、えらいだらう。嘘と思ふなら、見た人がいくらもゐるのだから、證據人として、呼んで來てもいい』すると、側で聽いて居た一人が言ふには『君、其話が眞實なら、何も態々證據人を呼ぶには及ばん此處を印度だと思つて、一番飛んで見せてくれ、ばい、じやないか』

### 其四十三 子供と金米糖

子供が金米糖の這入つた瓶の中へ手をつき込んで出來る丈け澤山握んで、さて手を出さうとした所が、瓶の首の所でつかへて、どうしても出すことが出來ぬ。金米糖さへ、離せば出せるに決つて居るけれども、夫はいやだし、夫かといつて、手を抜くことも出來ず、困つてくくとうく泣き出しました。

おッ母さんは、泣き聲をきゝつけて、何事だかと思つて來て見ますと、こうでせう。そこで靜かに言て聞かせました。

『坊や、お前、手に持つて居る半分丈けでよいとしないさい、すると、手を引き出す事が出來ようから』

一度に余り多くを企てるな

# ●室内の遊び

皆様！追つ付け冬休みと正月のお休みが來ます  
次の様な遊びをするのも面白いでしょう。

## (三名あて)

五六人も寄つて、一人は目隠しをして待つて居ますと、其前へ残りの者が、一列に并んで立ちます夫を片端から、誰さん〜といつて名を當てゝ行くのです、當られる人は、決して物を言つたり何かしてはならない。そして、當て損へば、何時までも其役になる、言ひ當てれば代りの者が出て、目隠しになります。

## 四) 西班牙の商人

一人が室の外へ出て居ると、残りの者が相談をして、皆が(室の外に行つた人も)誰でも知つて居

十八  
る書物の名を一つきめて置く、夫から、外に行つてる者を呼んで來る。すると其者が、

『あなたは何を賣るのですか』

といつて、室内に居つた人に向つて、一人〜に聞いて歩く、問はれた人は、其間に對して、何でも前にきめて置いた本の中に在ることを取り出して答へる、例へば、一人は『私は猿をうりませう』といへば、又一人は、『私は團子をうりませう』私は鬼をうりませう』など、云ふ。そこで、其答へを考へ合はせて、買手は『夫では桃太郎の本』といひ當てるのです。當て損へば、何度でも外に出される、當てれば、代つて買手になる。

## (五) さいちゃんときちん

これは、中々容易に教へられない秘傳ですが、仕方がない、大負けにして教へましょう。

先づ六七人が、輪の様に圓く座ります。そこで其中の一人先づさいちゃんが手拭で目を隠す。すると良ちゃんが『さいちゃん、いゝですか』と言つて、さいちゃんが『ハ、よし』といったら、そつと誰かの手に觸るのです。そこで『さあ、よし』といつて、さいちゃんの目をあけてやると、さいちゃんはすぐ、今良ちゃんの觸つた人と言ひ當てますから、さあ他の人は、皆不思議がつて、も一度、も一度とやらせまされど、何度やつてもさいちゃんにあてられます

これは、他の人には知らせてならないので、さいちゃん、良ちゃんとが、ちやんと前から相談をしてどんな人に良ちゃんが觸るといふのを決めて置いて居るのです。夫は、何でもいゝから、座つて居る人の中で、一番前に物言ふたり笑つたりし

た人を觸るのです。だから、さいちゃんは目を隠したら、いろんな事をして、見せると、皆笑ひ出しますから、誰が前だといふことをよく聞いて居ねばなりません、良ちゃんは、其人を觸るのですから、

まだありますが、あとは、お正月のお楽しみ

### 英語一口ばなし

ゆ き 子

▲『向うに飛んで行くのは燕ですか』

『うゑ 燕はわんにそうろく Swallow と飛ばなくてよ』

▲『あれは 牡鶏でせうか』

『そうねー、チトへん、hen ですねー』

▲『あのね、家の姉さんにね、此猫を聞がりで見

せてやつたら 吃驚して キヤツと (キヤツト) 泣き出してよ

●前號考へものゝ答

一番は、かたつむり

二番は、たまご

三番は、人の吐く息

●此次の考へ物

一、私は家に居て、夜も行き晝も行きますが、夫

でも外へは行きません、あてゝごらん。

二、足の數六本あつて、其中四本で行くものは?

皆さん! 月日のたつのは、早いもので、今年

も、もう、これさりで暮れることになりました。

二十

此雜誌も、來年は年一つを重ねて、第四年になります。そこで、ますます此子ども欄を面白くして行かうと思ひます。ねとぎ語り、室内のね遊びも、面白いのを澤山のせる事にしませうし、考へ物も、だんぐと甘いのを出しませうし其他にいろ／＼學問のね話や、細工物のしかたなども入れて行くことにしませう。で、皆さんの方でも面白い思ひ付きだの、ね話がありませんなら、どうか送つて頂きたいものです

子ども欄記者

## 家庭



## 吾人身體上の悲觀（承前）

寺田勇吉

尙各學校に就て最近の統計表を見ると、多少生徒の体格が能くなつて居るのは、大いに望みあることであります、吾人の体格の悪い原因の一は從來の教育の仕方が誤つて居りはせぬかと思ふ、就中今日の女子體格が一般に虛弱であるといふことは諸君の御認になつて居ることで、尤も今日の生徒は能く運動なされや結果で、新しい所の學校の

統計を見るといふと、身體が多少能くなつて來た併しなから全體から謂へば、猶ほ教育家諸君の力を借りて之を矯正しなければならぬと思ひます、今猶吾人の身體の惡き原因の一二を少く詳に申上て見よふと思ひますが、然るに私は衛生學者でない醫者でもない素人でありますから、其専門に屬することは専門の學者に譲りまして只教育上の側から、蓋し此等か原因であらうと信ずる事を述べて見たいと思ひます、偕今日の教育は智育に重きを置いてあります、父兄は子供を幼稚園に入れて「いろは」が讀めることを非常に喜んで居ります、幼稚園は決して、斯ういふ文字を教へる所でない唯善い習慣を作るのであるのに、父兄は「いろは」が讀めるといつて喜んで居るものが澤山ある、又教師も智育に傾いて子



弟に知識を與へるといふを主として居る是は私共の申す迄もなく、眞の教育でない、教育と申せば、無論此智育、德育、体育といふ此三つが相並んで行かなければならぬ、然るに德育の欠點といふことは随分今日は甚しくなりました、悪いことを何とも思はぬ、例へは圖書館杯に於きまして、番人が餘程注意して居りまするが、觀覽者の中には本を持つて行つたり、或は書中の圖を奪つたりするものがある、歐羅巴にては決して此の如き事はない、日本にては、公德缺乏の結果、社會の人は悪いことをしても、一向に恥と思はぬやうの傾きがあります、當地方杯も商業の地であり近來餘程商業が盛になつて行くやうでありまするか、一般に申すと、どうも未だ商人の考へか島國的根性を脱しませぬ、人を欺きて賣り附けるといふやう

の傾きを有して居るものが澤山あります、どうも外國商人は日本の商人と取引するのに餘程手數が費る、日本人より品物を買ふには一々其品物を改めて見なければならぬ決して見本で賣買が出来ぬから甚だ困ると謂つて居る、商業を段々盛にしなければならぬのに一方に於ては信用といふ問題が全然欠けて居るから、吾國の商業の發達は現今の有様にては、六ヶ敷い現に印度邊りに行つて見るといふと、一時日本の商業の段々盛にならうとしたのが、今では獨逸人に其商業の權力を取られて居る、日本人の持つて行くものは怪しい品物で何時破れるか、信用の出來ぬものである、斯ういふやうに信用の地に落ちて居る所へ、獨逸人は自分の國の品物にて悪いものは日本製である、といつて、廉く賣り、善い品物であれば是は獨逸

製 あるといつて居る、随分能くないことであるが、兎も角も日本人の信用といふものは地に落ちて居ることは争ふべからざる事實であります、さういふ風で細かいことを申上げますと、未だ澤山ありませうけれども、さういふ風に信用を重くない、其信用を重しないのは、教育の欠點であらうと思ひます、又一方から申すとそれは詰り社會の上流の人が悪いのである、それであるから社會上流の人が能くなれば社會の全体がよくなる、それ故に今日の教育者は德育の點に至ては決して自分の預つて居る子供に教育を與ふれば足りると思はずに先づ父兄からして教育をしなければならぬ父親も母親も教育をして行かなければならぬ、教育者の地位は實に今日は困難なる場合に立ち至つて居ると思ひます、苟も教育者になつた以上は困

難があつても德育のことに就て、自分が模範と爲つて社會全体を矯正するといふ斯ういふ覺悟をしなければ致し方がないと思ひます、さうすれば、急には矯正するといふことは出来ませいか何時か矯正し得る時期が來て英國の如き状態になる時があらうと思ひます、英國などにては一寸と鐵道などに乘つても解る、手荷物も預けても合札も何も要らない、私は倫敦から「マンチエスター」に行きました「マンチエスター」に着きましたら、自分の荷物が確實とあつた、乗客は各自分の荷物を持つて行き決して無くなるといふことはない、亞米利加にても郵便箱の中に郵便物の這入りきらぬ時には、郵便箱の上に之を積て置きますが、子供もなにもこれに惡戯するものも何もない、是は詰り教育の結果であります、所が我國では瀛車の中

に居りまず間でも、非常に心配で仕方がない、搦  
 摸は居らぬかと思ふて、夜分杯は祿々に睡ること  
 も出来ない、當今博覽會杯に見物に出懸ける人が  
 毎日新橋から、大阪迄の間に瀛車に乗り込むもの  
 か、何千人であるか解らぬか其旅行も、少しも安  
 心することが出来ない、又旅店に泊まるにしても  
 少し金でも餘計に持つて居ると奪られはせぬかと  
 思つて安眠することも出来ない、所か西洋でも無  
 論悪いことをするものも澤山ありませうけれども  
 歐羅巴諸國に於ては、旅店で物を奪らるゝとか、  
 瀛車の中で物を奪らるゝといふことは殆んど無い  
 といつて宜い、どうもさういふ點は美望ましい、  
 それは宗教も無論與つて力あることと思ひまする  
 か、教育の結果であります、智育といふことは、  
 日本では非常に重きを措きおするか、比較的に徳

育、体育といふことには、充分に注意をして居ら  
 ぬやうに思はるゝ、歐羅巴の文明國人は外國人に  
 對しても、掛値といふものかない、露西亞、伊太  
 利、西班牙の如きは顔を見て外國人と知れば掛値  
 を謂うことがあるが獨逸、佛蘭西、英吉利、等の  
 文明國に於ては、掛値といふことは謂はぬ日本に  
 ては正直や杯といふ札を掛けて置いて矢張掛値かある  
 さういふ見世がどうも大阪邊りにもある、殊に近  
 來、諸國の人が入り込んで來て田舎人並外國人に  
 對しさういふ取扱をすることが随分あります、  
 そこで教育の仕方も段々と改めなければならぬ  
 か全体教育統計の方で調べて見るといふと、年々  
 歳々就學の歩合が増して居り教育は普及して進ん  
 で來て居りまするが、吾人の身體が段々悪くなつ  
 て居る、澤山金を費つて教育をして、多少知識を

與へた所が其身體は悪くなり、徳育は欠くる所あるといふに至ては教育しない方が却て善いと思はれる、體育のことを申して見るといふと、近來幾分か善くなつて來たやうでありますが、どうも日本人は體操を重じない歐羅巴杯に於ては、殊に瑞典あたりでは、體操場は、神聖侵すべからざる所となつて居る、男女老若の別なく之を行らなければならぬやうに之を重んじて居らるゝ、從て歐羅巴の中では瑞典人が一番身體が善い、歐米各國を巡回して見た所で、一番體育のことに就ては瑞典が宜いといふ感じを持つて居ります、獨逸邊りでも近來瑞典式を輸入して之を行つて居るのであります、日本人の體格の悪いといふのも、段々日本人が奢つて來て、砂糖杯も餘計に用うるといふことも一つの原因でありませう、又眼の悪くなるのは

夜分杯も燈火の不充分の所で小さな文字の書物を讀ませるとか、又學校で光線の不充分なる所で讀書させ之を打ち棄て置くといふことも原因であらうと思ひます、年々生徒の目が悪くなる、齒が悪くなるといふて居るのはどうしても、打棄て置くことは出來ませぬ、又一般に吾々の身體を良く丈夫にしますするには、此遊戲體操といふやうな、種々の方法を用ひまして之か發達を圖らなければなるまいと思ひます、私は大阪には屢々參りましたか二三年前より大阪の女子教育の仕方は餘程以前とは仕方が違つて參りました、今日の大阪の女學生は以前とは違つて、活潑になられて、體育なども此分では、大に能くなつたらうと思つて悦んで居ります、それから、日本人の弱い原因は、………只今本校等に御出での御方には能く御注意になつて

居る様でありませうか、一般に申しますると、どうも婦女子の身體が弱い、歐羅巴の男子の身長は三寸日本人よりも高く、又體量は二貫三百目多い、歐羅巴の婦人と日本の婦人と比べて見るといふと體量は二貫六百目許り少い身長は九寸七分許り低い、先づざつと、一尺許り低い、其上總ての身體の構造が虚弱である、それで婦人は私が申す迄もなく身體を健全にしなければならぬ、幾ら男子が丈夫であつても其子供の身體は決して完全なりといふことが出来ない、母が弱ければ丈夫の子供の出来やう道理がない、就中、女子の方は歐羅巴人に對しても餘程小さい、西洋人と日本人と大分結婚したものがありまするが、日本人が西洋夫人と婚姻して散歩などをして居る所を見ると實に見苦しいものである西洋の男子は身體が大きいから、婦

人の身體が大きくも見苦しいことはないが、日本人が西洋人を細君に娶るといふと、良人は細君に引張らるゝといふことになる甚だ不體裁極る、現に日本の男子が西洋婦人と結婚して一緒に歩きながら、さういふ不體裁を演ずる者が幾らもある歐羅巴の女と日本の女と比べて見るといふと、種々大變に違ふ事がある、御婦人方の御出での所にて申しまするのは失禮でござりまするが第一に日本の婦人は餘程不精である、西洋の婦人は一般に能く働きます御承知の通り西洋では中流以上の立派なる細君も午前の十二時までは色々の仕事をして居ります、下女を使はないものもあり、下女を使つても細君は午前中は非常に働くそれから晝飯を仕舞つてから始めて着物を着替へ人に交際する爲め外出もするし來客にも接しますが午前には朝食事

を仕舞ひますると、直ぐに自分が策を提げて野菜  
ものなり、肉類なりを買つて来る、自分が買つて  
来る爲めに新しくして安いものが買へる所か日本  
ではさういふ風でなく、主人が二三十圓の月給を  
取ると、其細君は奥様であつて、家に居つて、八  
百屋が来る、魚屋が来る、酒屋が来る、自分は凡  
て家に座つて居つて、買つて居るから、到底安い  
ものや新鮮なものが買ふことが出来ない、且つ甚  
だ身體の爲めにも宜しくない、人を使ふことを高  
尚である、立派であると思ふのは、封建制度の餘  
弊である、それが今日迄残つて居る、旅人が旅舎  
に行くとは蝙蝠傘一本でも下女が持つて行く客の方  
ではそれを持たして立派であるやうに思ふ、瀛車  
を降りて、赤帽に鞆を渡たさないと、彼の人々は客  
畜だそれで持たせなくても宜い品物を持たせてさ

うして二錢か三錢か遣れば宜いのに、五錢十錢も  
やつて、お辭儀を餘計にさせる、お辭儀されぬか  
らとて馬鹿になる譯でなく、お辭儀されたからと  
て紳士といふ譯でない、とうも、日本人には悪い  
習慣があつて、殊に女子杯には、さういふ風があ  
るです故にどうしても家内にては出來得る丈下女  
の數を減らして、細君は午後からは奥様、午前は  
下女といふ考へを以て、働く様に願いたい左すれ  
ば自から家も清潔にして買うものも安く買ひ、身  
體も丈夫になるといふとは誠に結構なることであ  
ります、是は學校教育以外に於てさういふ風に充  
分に我が同胞の婦人を教育して、之を實行して頂  
きたい、殊に、日本の下女は西洋の下女とは大に  
趣きを異にして居る、西洋の下女は警察から帳面  
を貰つて、其帳面を持つて下女を雇ふ家に行つて

此前には、何處に居つた、其品行はどうであつたさういふとを書き込んだ帳面が無ければ、奉公に行かれない、餘程奉行人が確である、日本ではさうでない、周旋宿が唯世話賃を取りさへすれば奉公させる、成るべく給金の多い方に行かうとして居る、此周旋屋より来るものは、吾々の爲めに最も必要な所の臺所を托する隨て臺所は多く不潔にして行届いて居らぬ、元來一家の經濟といふものは下女があつても、細君の腕で充分働らかなければならぬ、日本の婦人の心懸は大に改めなければならぬ、又日本の男子は、どういふ婦人を愛するかといふと、只顔の奇麗なもので身體の肥満せぬものを愛する、それは男子の考へが間違つて居る婦人の方もさういふ譯であるから、自然にさういふ形體を希望する傾になる、亞米利加邊りでは、

は、働き手で、非常に身體の大きいものを愛します、外國では、身體の丈夫な婦人をお相撲さんといつたり、軍曹といつたり、警部長といつて居るそれであるから、成るべく働かずに、色の白く、手の餘り肥満くしないように仕様といふことは自然の勢であります、決して女子にのみ色が黒くなつて、丈夫であつて活潑にお働きなさいとは謂はぬ、それと同時に男子の方にも亦斯ういふ考へで、一緒になつて、さういふ女子を愛するといふ考へになつて、それを尊ぶといふ風にならなければならぬ是は一朝一夕にさういふことは出来ずまいけれど、さういふ風に獎勵して頂きたいそれから、日本の婦人の働かぬのは着物が一つの原因である、今日學校に御出になつて居るものも彼の袴を穿くやうになつてから、大いに運動が

出来るやうに成つて來た。是は婦人の體育を助くるものであらうと思ひます、併し學校に行く時許り穿きになり、學校以外に居るときには、穿かないて居る、通常厚い帶を締めて袂をふら下げて重い下駄を穿いて居る、下駄も少し重いものになると、片一方許りでも、二百五十匁から三百匁位ある、加ふるに足に着物の裾が纏つて充分に歩くことが出来ない、寧ろ人力車に乗つた方が宜いといふことになる又一方には人力車に乗るに見榮への爲めに乗るものがある、此人力車は目下交通機關の不備なる時に於ては、悉く止めて了うといふことは出来ぬけれども、少くとも節車をして頂きたい、現在我日本帝國の人民は、一ケ年に人力車の爲めに五千萬圓からの金を費して居る。東京杯にても、人力車の數は四万からありまして、其

費す處の金は、年に一千萬圓を費して居る、婦人が今日の如き着物を着て居つては、何處に行かうとしても、歩くことは出来ないから、人力車に乗るといふことになる、之れは獨り乘客の爲のみではない又人力車夫其もの爲めにも宜しくない、車を引く爲め身體も悪くなり、品行も悪くなる、今日の所では、それに代はるべき所のものがありませぬから、止むを得ずして、人類が動物の眞似をして、車を引いて居る、吾々の同胞がそれを引くといふことは、實に悲しきことと信します、故に諸君は出來得る丈、人力車に乗らぬといふ方針を執つて貰ひたい、それには、御婦人方には、特にさういふことは、卒先されて、餘り重い下駄杯を穿いて歩かないやうに致したい、此節は、島田鬚などは澤山見えないやうであります、頭髮に



油などを附けて丸髷や島田刈に結うといふことは宜しくない、餘程頭が重くなつて、且つ不潔になる、どの點から謂つても、害がありますから、成るべく束髪にし軽い下駄を穿いて、自然に活潑になるやうにしなければならぬ、衣服の問題に就ては、屢々洋服に改良するといふことなどに就て、考へても見ましたけれども是は家屋の構造と伴つて、研究しなければならぬ只今直ぐに洋服に代へた所が家屋の構造が其れに適するやうに出来まいと思ひます、又經濟上の點から謂つて、疊を無くして腰掛けにするといふことも随分困難でもありますから先づ當分婦人をして成るべく活潑に働くことの出来るやうの工夫をしなければならぬと思ひます、一体男子は戸外に出るときは洋服を着ても家に居るときには、直ぐに日本服を着て座つ

て居るそれでは、矢張宜しくない、女子の衣服を改良すると同時に、男子の衣服の改良も研究しなければならぬと思ひます、日本人の身體の惡くなるのは種々なる原因もありませうが、女子の身體をして強壯ならしめ、丈夫な婦人を作るを第一とします、日本の婦人は西洋婦人に比べて見ると甚だ弱い、西洋には幼稚園が至て少い、日本にては比較的に多い、西洋の幼稚園は女子の職工や何か、其子供を朝、預けて行つて、晩に工場から歸りに其子供を受取つて来る、斯ういふ貧民的のものが多い、日本では皆華族的である、又小供を幼稚園に遣る所のものは、中以上のものでなければならぬ、却て金が費るといふ風である、其所で日本の妻君には幼稚園の保姆たる資格のない者が多い、西洋では母たるものは其資格を有て居る

から何も中以上の家にては小供を幼稚園に出す必要がない、自分保母であるから家族に對しては非常に母の權利、母の勢力といふものが強いのであります、彼の國にては、殆んど子供の教育といふものは母の手の中にあります、西洋の婦人の家内に於る權力といふものは教育があるからであらうと思ひますが却々強いどうも日本では、從來の習慣でもありませんが、女子は男子の命に従つて居るのみで其柔順といふものが終に卑屈に流れて居る、一般の婦人が自分の良人に向ていふべき丈のことを謂ひ、下女始め、子供迄も母さんを非常に怖いといふやうに日本にても致したいと思ひます日本にては、子供が父親に叱られるときは母親が内證で金を呉れたり、菓子を呉れたりする、西洋にては、さういふことはない、又私は婦人の品

位を高尙にするといふとは望む所であるけれども女子をして、餘り高等なる教育を受けしむる必要はないと思ふ、故に一般の女子をして、専門教育を受けしむるといふ必要はないと思ひます、日本に於ては氣候も宜い、及び生活の程度も低いのでありまして彼の西洋の如く結婚し得ない婦人といふものも少ない、西洋では今日結婚年齢に達して居るものが何百万人も餘つて居る、此等の人は終身、獨身にて生活しなければならぬ、其所で終身家に居つて結婚が出来ぬから、女教員でもして暮らさうといふ考へを以て高等女學校邊りに這入つて居る婦人が澤山ある、それ故に獨逸邊りでは女子師範學校の數は甚だ少いが女教員の希望のものが澤山ある、女子の師範學校の教育を受けないで、高等女學校の卒業試験を経て居るものは、免

狀を貰つて、終身教員にて、獨身にて暮す事が出来る、併しながら、女子が獨身にて終身暮すといふ、此位不幸なことはない、又今日高等女學校の教育の仕方は全然宜しいかといふと、私はそれに満足しない、モット之を實業的にして出來得る文學課等も簡易にして、其代りには教師の授けた所のものは悉く能く記憶して、之を應用し得るやうにして、學校を卒業して、二三年も經つと悉皆忘れて了うとの無いやうにしたい、獨逸邊りに行つて見ると、高等女學校にては、非常に清潔法を勵行して、居る、それで學課杯も日本の高等女學校などより程度が低い、其理屈の能く解る迄教へて居る、其進度杯も至て早くないやうに思はるゝ。併しながら學校を卒業して了つてから之を應用して、始終實際に當つて、行つて居る、彼國の學校

では程度は我國よりも低いけれども、立派の學者も出來、諸種の器械を發明したりするのは、應用する力が充分にあるからである、且つ婦人の體格も良いから人の細君となつて、餘り病氣で始終就學するといふものも少いやうである、教師にしても東京邊の學校教師はどうも、欠席勝である、西洋人は十人の中に一人も欠席といふことはないやうである、矢張實際其の身體が能く出來て居るからでありませう、日本人は元來弱いのに乗らなくも宜い時杯に人力車などに乗つて、一層身體を弱くするといふのも一つの原因であらうと思ひます、元々西洋人は生れたての時は丈夫に生れ、其上段々教育の結果丈夫にされて居るから、年を取つても、身體が丈夫であるものと見える、要するに種々雜多の原因があつて、日本人の體格の悪い

といふことでありまするが、身体強健なる婦人を稱して、相撲取であるとか警部長であるとかいつて、嫌うといふ、さういふ悪い風があるから、いけぬのである、さういふことは大いに間違つて居る、教育家諸君の御盡力で健全なる婦人を作られたなれば將來の日本人が年々歳々身長及体量の減るといふことは無からうと思ひます、どうか諸君に於ても此點に就きましては充分に御實行あつて、どうぞ、吾々の体格を充分に發達させるやうに御盡力下さることを偏に希望致します甚だ長い間だ御静聽下さりまして、深く謝する次第であります

(完)

昔 今 いろは料理

石井泰次郎

(二)

紅葉でんがく拵方

魚肉を程よく切たる物、又貝の類にても、又魚の半辨の作りたる物にても、田樂豆腐の如く焼て、味噌のすりて漉したる物へ蕃椒を極めて細かに赤き所のみを刻みたる物をまぜて、砂糖と味噌と水少しとを合せ、鍋にて火にかけねりたる味噌を付て焼くべし、紅葉みそをつくる故にもみぢでんがくといふなり

紅葉麩の拵方

麩を煮染るに、まづ酒にて煮て、次に醬油をさして色をつけて、次に油にてあぐべし、色の深く見ゆるによりて紅葉麩といふなり

もうりやう 拵方

この拵方は、卓子料理の一種なり、そぎ大根、わりねぎ、鳥肉、一色づゝ菜は湯煮して、鳥はよく煮てこまかにさきて、鹽ばかりにて味をつけるなり、こゝには鹽ばかりといへど、鹽と胡椒とを加へたる方よろしかるべし

もづくの 拵方

海蘊は春とりたるを柔かにしてよしとせり、之を用ふるには吸物に、汁にも用ふべし、まづ鹽もすくにて、生にても、温湯にて灰をつけてもみわらうべし(灰汁へつけて取上あらしぬまりとれてよし)

もろこし餅の 拵方

唐黍の粉と、うるち米の粉と一升宛を合せて、湯にてこねて、小さく丸めて、蒸籠に入れてむすべし

(二廿)

煎餅玉子拵方

玉子をわりて、鹽、砂糖を少し入れて、細申にてよくかきませ、布にてこして(馬尾篩にてうらしすべし、焼なべに油をしきて火にかけ置き、其なかへ薄くむらなきやうに流し、白ごま、いりたるを少しふりて、こげぬやうに焼て、丸くも角にも切てはいろにかけてよし

煎餅いも 拵方

さつまいも大きなを、厚さ一分あまりに切て、日にほして、遠火にてむらなく焼くべし(こげめつかぬやうに) または油にてあけてもよし

(二す)

すだち玉子拵方

玉子のわりたるを、一合のかさに、豆の粉(きなこともいふ) 蜆貝に一盃ほど入れて、細き竹串五

六本にて、能くかきたてゝ泡たちたるを、鉢に入  
れて、蒸籠に入れてむすべし

### 酢の物の酢の拵方

三盃酢は酢一盃と酒一盃と醬油一盃とを合せてつ

くるべし（酒の所を味淋の煮切を用ひてよし）

合せ酢は、味淋の煮切と酢とを合せて用ふ

煮かへして用ふるを、煮かへしずといふ、

砂糖の煮とかしたると酢と合せたるを甘酢とい

ふ、正しくはみりん煮切を酢と合するをいふなり

いそがしいのでねかまひも申ませんでした、

いろは料理はこれにて一寸をはりといたしま

して、つぎはなにかやさしいのを、いろはよ

りは、すこしうまく料理うつもりです

何が御馳走にできますか來年の御たのしみに申

さずにねます、其おつもりでおまち下さい



### 兒童心理

文學士 松本孝次郎

### 恐怖（或は恐懼）

此の恐怖の情は幼兒の未だ幼い時から起るもの  
であるが、其重なる原因は一遺傳、二無知識、三虛  
弱、四經驗である。

一、遺傳が恐怖の原因になるといふことは眞の  
説明のつかぬ場合が多い。例へば鶏の雛が初めて  
鷹を見た時から己に之を怖れる。又墓が蛇に逢へ  
ば初めから之を怖れる。これは著しい遺傳と稱す

べきものであるが。人間の場合になると一寸分り難いのである。他の場合で説明の出来ないのを遺傳であるといつて居る。例へば幼児か馬を見て怖れる。犬を見て怖れるなどはこれである。大人でも他の三の原因によらずして非常に猫を恐れ、鼠を恐れ又蝶を恐るゝものがある、

二、無知識から起る恐怖、これは度々あることである。かの幼児が海岸に出て向ふの方に大きな波の立つのを見て怖れ、又大砲の響を聞いてこわがること、又田舎者が新橋の停車場に着て、凡て其邊の事を知らざるがために何れの方に進み行きて可なるやを知らず、何れに向つても叱責せらるゝ心地して怖ること、などは皆無知識から起る恐怖である。又かの幼児が暗い處を恐れるなども此の原因によるのである。即ち只暗いばかりで、そ

こに何も怖い物がないといふ事が分らぬのである故に此場合には或人々がする様に「暗い處にも何も怖いものはない、どんく行け」という様に仕向けるのは誤りである。明るくして何も怖いものゝないといふことを知らすべきである。即ち知識を興へるのが適當である。かの化物の話をして幼児を怖からすのは幼児の無智識に乘してすることで教育の原則に背いて居る。

三、虚弱、身軀の虚弱な人は一体に怖かり易い一寸咳か出ると、もう肺病になりはせんかと恐れ腹か痛めは胃病ではないかと恐れ、傳染病者に近づけば傳染せぬかと恐れる。其他皆斯様なもので虚弱な人は一般に恐怖の念が強い。加之神經か過敏であるから、少しの刺激に對して、烈しく恐怖の情を起すのである。學校の試験に於て、虚弱

の生徒の脈搏の數か恐怖の情のために急に變ずることは往々見ることである。

四、經驗から起る恐怖、これは自分が曾て自ら經驗して害を受けた爲に怖かるのである。故にこれには恐れる理山がある。教育上からいへば第三までの原因に由つて起る恐怖はなくして第四の經驗から来る恐怖は保存して置いた方がよいのである。只過度に恐怖せぬ様に原因に比例して恐怖する様にしたいのである。世間には何でも幼兒を怖からせない様に憶病にせぬ爲に何物も怖からぬ様に教育する人があるが、これは大なる誤である。恐るべきことは恐れさせるといふことは必要なことである。そうでないと、幼兒は非常に粗暴になる。軍人の子弟には屢々非常に粗暴なものがあつたが、これは幼い時から何も怖からせぬ様に教育し

た結果である。又反對に日本では從來父親といふものは非常に怖からせてあるが、これも又適度を失して居る。而して恐怖の情が適當の度を失へば二つの極端となる。一方は何んでも怖がる、即ち憶病となる、これを直すのには智識を與へるのによろしい、而して他の方の極端は粗暴となる。これには、粗暴は非常の不利である。眞に害を受けることがあるといふことを言ひ聞かせるのである。親でも教師でも幼兒を畏がして幼兒を服従するものがあるが、これは一時其功を奏することがあつても、適當の方法ではない。何故なれば幼兒は畏かす人に對して同情を持つことが出来ぬから同じく服従しても喜んで従ふのでないから、眞の服従でない、加之畏かすために幼兒の心体を疲勞させて、大に勢力を害するものである。故に同



情をもつて親切に誘導しなければならぬ。

# 奇妙な動植物(ついで)

田 寺 寛 二

前號に於きましては生存競争といふ事を極手短かにお話ししましたが、斯う云ひますと世の中は實に悲雲慘膽たるもので、命が縮まる様な氣がしますが、左様ばかりでもありません、又互に扶けあひ、共に一致團結して相親むといふ温かな潮流も流れて居るのであります。

此温かな潮流と云ふのは、所謂共同生活とか共生とか云ふものでありますして、全く種類が違つて居る動物(植物にも共生といふとあります)が其は植物のお話をする時に述べませう)が、共に生活をおこして、お互に繁榮を謀るのであります。

三十八

前號で已にお約束申しました通り、此度は昆虫のお話をする筈なのですから、此共生といふ事も昆虫の中から材料を探りませう。(「からす貝」と「たなご魚」との共生なども随分面白いですから、御研究になるのもいいでせう)

茲でお話しやうと思ふのは、蟻と蚜虫との共生であります。この蟻はクマアリと申しまして、蚜虫はミドリアブラムシといふのであります。

此二つが何んな方法で共生するかと申しますとクマアリは常にミドリアブラムシが棲んで居る近くの枝を往復します。アブラムシといふのは植物の嫩葉を食ふ害虫でありますが、蟻は樹枝を往復してをるとき、此蚜虫を害するテントウムシとかクサカゲロウ(何れも幼虫のときから盛に蚜虫を捕食するものです)を追つて、まことに大切に保

護するのです。

是れは何故かと申しますと、ミドリアブラムシは腹部から一種の甘い液体を分泌しまして、クマアリに與へるからであります。此甘液は往々樹の上に積みまして、樹下に滴るをあります、昔甘露が降るといつたのは此事であります。

さて蟻は何んな方法で、此甘い液を蚜虫から取るかと申しますと、蟻が枝から枝へ移つて行くときに、其頭の處にある觸角を以て、蚜虫の腹部にある二本の細い管に觸れて、其腹部の末端にある肛門から分泌する無色透明の甘い液を舐めるのであります。然し他の物が此細い管に觸れても、蚜虫は少しも其甘液を出すことはないです、だから丁度蟻と蚜虫とは何か特約でも結んでゐる様です、斯様に蟻は蚜虫からいゝものを貰いますから、害

虫を追拂つたり、地上に落ちてゐる蚜虫を樹上に運んだり、或は蚜虫が居る樹の枝に其食物がなくなると、之を他の枝へ移したりして其繁殖を謀るす、だから樹木を栽培する人は、蚜虫が発生して居ることを發見したら、直ぐ殺してしまはなければなりません。

此クマアリとミドリアブラムシとが共生して居る有様は、丁度吾々が牛を飼うて其乳を得るのと能く似てゐるでせう。

己に此例によつてお了解になつたでせうが、此世の中も生存競争といふ様な怖ろしい競争の外にまた共生といふ様なよい親密な所があるといふことは明かでせう。



# 史傳

## 黒澤登幾子傳補遺

下村三四吉

余は、本誌第二卷第九號に黒澤登幾子の事歴を掲載し始め、爾後數號に互りて完結せりき。その間、本年三月の末水戸に遊び、登幾子の事蹟に就きて聊か聽き得たる所あり、又幸にして郡司篤信氏の編述にかゝる『古今烈女時子』と題せる一書を獲たり。該書は、即ち黒澤登幾子の傳記にして、その末に、登幾子が藩主水戸齊昭公の冤を雪がんとて京都に上り、拘囚の身となりて江戸に送られ、遂に中

四十

追放の刑に處せらるゝまでの自叙記を附載したり。前者たる傳記の部は極めて簡略なれど後者たる附録は叙述頗る詳密にして登幾子の事歴中最も精采ある部分の委曲を知ることを得べし。よりて、余は該書に據り、本誌上掲載の拙稿につきて、二三の補遺をなさんと欲す。

○登幾子が、京都にてかの長歌進達の計畫を遂げて、大坂に赴き、こゝにて町奉行配下の同心に捕縛せられて獄に下りしときの狀況につきて自叙記の述ぶる所は左の如し。

……かもひ出せば、十八年以前野州那須の湯にて夏中諸共に遊び居しものあり、……………その人は先の連合に別れて、今は天満六丁目の皮綿屋伊兵衛といへるものゝ方へ再嫁いたし候由に

て彼の所へ案内致され、…………十八年が其間の昔談終夜語り合ひ、古郷へ歸りし心地して其夜は心安かりけり。明くれば、四月朔日……裏座敷にて風流雅たる物語など致し、去る大鹽平八郎の實錄など出して繰りかへし、感涙袖をうるはしける。…………隱居なる老母弟子三人連にて錢湯へ入、一丁四方の皮綿屋が地面を廻りて立歸る。…………皮綿屋が軒下にて同心二人内より出で、京より御頼にて御尋の筋ありといふて、林より捕縄を出し、内手にしぼりて連れ行かる。行年五十四歳始めて天下の爲に御繩を蒙る。其夜は三ヶ所連れあるかれたり。

曇りなき心のそのますかいみ

うつして見ませ日本言の葉

とよみて、出しければ、一人の同心申すやう、

何じややらぐつ／＼してわからんじや、又一人の同心申すやうナニサゑらひもんじやわいナア歌はトントわからんじや、發句なれば少しはわかるさかいナア左様ならば御題をといひければ盤の題にて、

飛ぶはたるなにはのあしの露ゆかし

ヲ、それはゑらふおもしろいはいナア。それより、角力之介殿夜更けて少／＼吟味あり。そちがいふことはトトわからんじやさかい、こちでいふこともわからんじや、ふナア。仰せ下されませ御言葉は一々私はわかります、私の申し上げませ言御わかりに成りませぬことは御間ひかへし下されまし。夜更けて少々吟味ありて旅道具の中より長歌の下書を見出さる。それより同心衆にいざなはれ、夜七ツ時のころはひに

始めて牢屋敷の揚屋へと連れゆかれ、大門口にて衣服帶残らずきぬ類をば襟ぐちまでもはぎとられ、髪もあばきて櫛かんざしも取あげ、牢屋敷の大門を開き入れらる。……………

右の文中「行年五十四歳始めて天下の爲めに御繩を蒙る」の一句、僅々二十餘言の中に、己れの老年の身たることを表示し、罪を被ふれるは國家の爲めなることを明かにし、しかも驚かず躁がず、泰然として縛に就けるの狀躍然として見るべく、斗牛をも衝くべき義憤の意氣を被ふに従容安靜の態度を以てす。何ぞ情致の沈摯にして婉約なるや登幾子その人の修養想ふべし。

○大坂にて一應の糺問を受けたる後、登幾子は更に京都に送られたり。

……………大坂御役所へ又召出され、山本善之進

殿、角力之介殿御兩所其外の同心等御いとまをたまはり、京の御手先繩をかけ替る。御氣のどくだがおまへじやさかいなアつよくはおませんかといたはる言葉のいとやさし。さすが京士の御手先深きめぐみぞありがたき。それより、淀船に乗せられ、京都より御請取の御役人大塚圓藏、……………大塚の曰く、大坂の同役より委細承りしが、其方事は、天下のため忠臣のために出で來りしと申す、感心致した。心配いたすな京へ行ては存分に申し上げ、はやふ御免になるやふに致されよ、必ず心配致すな。と、力を添ふるめぐみの言葉、實に武士の習ひとて、ねもき忠義をくみて知る情のほどぞ有りがたき。綱手をいそぐ引舟の引手おそしと夕まぐれ、伏見へこそは着きにけれ。それより伏見の船宿へ

上りて、繩をほどきて、支度をなをし、召人駕籠に乗せられて、いそぐつゝ、みの庭の道、寒さはいとい身にしてみて、比は卯月の十三夜月の影さへはれやらぬ心の底はとこやみのあやめもわかぬくらまされ、夜更けて京へ着にけり。其夜は牢屋敷の會所に置かれしが、翌十四日揚り屋を掃除して入れらる。……………向ふなりける十二疊敷の内には鷹司殿の大夫なる御方青木右京之介殿、隣なるは二條殿の大夫入江伊織殿、此方には皆水戸一件の御儀につき捕となりしなり、晝夜番人六人つゝ、寝ずの番一時替りに入替る、七分三分の夜廻りあり、嚴重なること恰もゑんま王廳の如し。……………

讀み去り讀み來りて、何れか心を動かさぬものぞ

(つゞく)



水仙花

文苑

雨峰生譯

谷また山を漂へる  
孤雲の迹のさためなく  
淋しくあたり彷徨へば  
時しも目には一むれの  
白衣金冠の水仙花  
湖の畔や梅の蔭に  
風にゆられてゆらくと  
踊る姿のふと見えぬ

天の河原の明らけく  
星の光りの斷間なく  
閃きわたる風情にて

湖入江なす岸縫ふて

見渡す限り廣ごりぬ

ちらと見し目に其數は

千萬ありと見ゆるまで

花を簪せる頭をば

楽しく舞を爲すがごと

ふり翳<sup>かき</sup>せるぞうれしけれ

花に沿ひたる細波<sup>さいなみ</sup>は

共に躍りつ見ゆれども

花はそれともいやまして

喜ひあふるけはひかな

詩人はかゝる頼もしき

友だにあらばまたさらに

樂しみたえてなくもがな

かくて深くも凝視れば

思ひえしらぬ何ものゝ

われに景色をかくまでに

實ところは見せしよな

さはれわが身の情なくて

氣もむすげれつ臥床にて

思ひに沈む其折りに

かの花影は眼底に

孤筆をいやす賜と

あふるゝまでにきらめきて

われとわが身を忘れつゝ

花水仙の舞ふ如く

わが身も共に躍るなり

御苑の菊

東くめ子

都のうちに

身はありと

思へと思へと

おもはれぬ

み池のすがた

山のさま

こゝや浮世の

外ならん

たゞ忘れては

み山路に

紅葉狩すと

思ふかな

夕日梢に

うつろひて

見る目映ゆき

秋の光

我大君の

ひろきみそのゝ

よのつねならぬ

雲の上にて

御めぐみも

菊の花

色香をば

見るがかしこさ

孝女

遠くさこゆる

聲もさびしく

しばぶく母の

春衣つゝるか

つねを  
雁がねの

ふけし夜は

まくらべに

かと女子

ふたり

くらき燈火を

はかなくたどる

ほそきけぶりも

夜ごとくくに

かき立てゝ

針のみち

たてがてに

つむげる

いとの

あかきころは

孝子のかいみと

ほめはやされて

ほまれも高き

かくれなく

ひと郷に

名もしるく

をさな

はらから

冬のきて

山もあらはに木のはふり

残る松さへ

峰にさひしき



説林



幼稚園の立場と其務（承前）

森岡常藏

其處でラインは如何なる様に幼稚園の立場を考へて居るか云ふと、有名なラインは次のやうに幼稚園の立場に就て考へて、居るであります。

それを申す前に小學校の立場から言はねばならぬ、それから小學校との關係であります、小學校の話をするに就ても獨逸の小學校はドウ云ふ風になつて居るか云ふ事を簡單に言ふ必要がある。

獨逸の小學校フォルクスシヨール譯すれば國民學校其の國民と云ふ意味は今では實際の意味に於て下層人民の意味である。國民學校へは中流以下の子供が行くのであります、中流以上の子供はドウ云ふ小學校の教育を受けるかと云ふと、それは中學校に附いて居る學校があつて、其の中學校に附屬して居る豫備學校、中學校の豫備學校である、それに直ぐに初めから這入るのである。故に小學校即ち國民學校に行くには別の途を執るのである。獨逸全体がさうではない、北獨逸がさうで南獨逸は三年間は國民學校で共同にやる、三年の後に中學校に行くは中學校、小學校で終るものは小學校で八年或は七年、獨逸は聯邦であるから制度が區々で七年で済む様になつて居るもあり八年もあります、一番下が三年一緒に小學校に行つて一部は

中學校に行く、北獨逸は中學校に小學校程度の豫備學校があるからそれに初めから這入る。故に教育の場所が富豪の子供と貧民の子供は初めから差がふ。

佛蘭西の初等小學校は日本の小學校に當る、其處へ這入る。財産の少ないもの、子供が這入る。財産の有るものは又中學校に附屬の學校に這入る。英吉利でも殆んどそれに似て居る。英吉利は私立が澤山あつて一様に言はれぬが、英吉利でもボードスクールと云ふは公立小學校で、それには財産の少ないもの、子供が這入る、財産のある者はパブリックスクールなどに其子弟をねくりまします、然らば英吉利も佛蘭西も初めから初歩教育の途が差つて居る其の點に就てラインは大に説を爲して居るのであります、歐羅巴の社會は今日は社會問題に苦ん

で居る時である。貧富の懸隔と云ふことを苦んで居る。社會の種々の方面に於て貧富の懸隔があつて、それが争ふて居るのであります。日本でも貧富があります、西洋の金持は日本の金持よりモウ一層大きくて、貧民は日本のより猶ほヒドい。一方は大厦高樓に住み、一方は蝸牛殻の様なわら屋に住んで居る。互に反目して相容れぬと云ふ事があつて、其の争ひが政治家凡ての人の頭を悩ます問題になつて居る。故に貧富の衝突を避ける様にする計畫が種々の方面に行はれつゝある。小學校に關連した仕事としてもさういふ事をして居る。例へば貧民の子供が學校の引けた後で家へ歸ると両親が居らぬ、市街をころつさまわる。其處で惡習慣に段々染むことになりましますから、少年の罪人が非常に殖えて居る、それも救はねばならぬと

云ふので學校がひけた後貧民子弟を學校の一室に集めて保護して善い話をきかせ又食物を無料で與へなどして午後七時頃迄置いて居る。一方から言へば慈善又社會事業で佛蘭西にも獨逸にもある。又貧民の子供は營養不充分である、さういふものを集めて夏休みの様な時に避暑する、海濱とか山間に子供を保養旁々連れて行くと云ふ事も小學校に關係した仕事としてやつて居る、或は慈善保養の様な意味で旅行させる事もある、學校に風呂場を拵へて入れてやるとか、或は夏休みの間に學校を開いて其處で下層人民の子供が日中暑い所に遊んで居るを憐みて其れを學校で手業をさす事をやる。一方には慈善事業であるが社會的仕事としてさういふ事をやつて居るであります。で、今日の歐羅巴の社會は社會問題に苦んで居る時である。

其の社會問題に苦んで居る時に貧富の子供を別に教育すると云ふことはドウであるか甚だ考ふべき點であつて、それは出来るならば貧富の調和を計らねばならぬのである。處が子供の時から貧富の者が教育上別の道を通れば、子供の時から彼は金持とか貧乏とか云ふ私黨心を造るものである。で初めから貧民の子供も金持の子供も同じ學校に入らざるが必要である。然らば今申した社會問題の上から言つても大變に助けになる。それから子供の時に交りをつ結んで置けば後に至つて善い感情を及ぼして社會問題と云ふものを和げる助けになる、それをするには日本の様に貧富民一緒の小學校が必要であると云ふがラインの考へでありますところが一方向から小學校を分けることを主張する。分けるを宜いとするは第一は子供の思想界が

違ふ。貧民の子供の思想界と金持の子供の思想界が違ふ。凡て教育教授は子供に思想界を本として施すべきものであるが、金持の子供と貧民の子供と思想が違ふ。貧民の子供はさきに申した通り、「我は學校に居る」と云ふ簡單な事さへ十分に綴れぬ位である。金持の子供はさういふ事は出来ぬことはない。想像力も違ふ。近い例が高等師範學校の附屬小學校の子供は作文が上手とかいうて人が驚きませんが教師の教へ方も良いのであらうが家庭の状況かこの方の發達を助けて居るので村落では望まれぬと云ふ事がある、併し理科の智識は甲に貧しく乙に富んで居る。兎も角思想界が違ふ。心の異つたものを一緒にして小學校教育を施すは不利益であると云ふが一方の主張である。又一方には金持の家庭からは貧民の子供と一緒に教

育されては困る。悪い風になると云ふ。此の二の點から共同教育を非難する。之を解決すれば金持の親からの苦情、詰まり貧民の子供と一緒に置くと風儀が害せられると云ふことについて斯ういふ事は事實である。貧民の子供を富民の子供と比すれば富民の子供は優勢である。それで貧民の子供が富民の子供に悪感化を及ぼすよりは、貧民の子供に好い感化を及ぼす方が事實に於て多いのである。さういふ事の澤山の例を擧げて居る。さういふ事から言つても差支へない。又富民の人は下層社會の人に對して義務を有たねばならぬ。成るべく下層社會の爲めに盡くす所がなければならぬ。それで自分の子供を兎も角貧民の子供と一緒にして良い感化を與ふる様に一の學校に入れるが必要である。それから初めの思想界が違ふと云ふ問題

これは六ヶしい問題であつて、その事は否むべからざる事實である。それをドウしたら宜いかと云ふことの上から幼稚園の立場が極まるのである。六歳まで抛つて置けば思想界が違ふ。故に國民幼稚園を立て、一般に三歳から富民も貧民も這入るやうにする。さうすれば其の頭の差ひがない様になる。それであるから學校の系統の中に入れて一番下の初階段として國民幼稚園を置き、此で三歳から六歳まで保育を受ければ記憶も言語も餘り差ひないから、其所で小學校へ進んで一緒に教授しても差支がなくなくなる。尤もラインは四年間は共同小學校として後に中學校へ行くものと分けやうと考へて居ります。其處で幼稚園の立場は上に述べた通りである。

である。小學校だけでやつては思想界の差ひが出来るから國民幼稚園を附けて頭の差ひを等しくする様にすると云ふ様にラインが考へて居る。幼稚園の立ち場に對する學者の考は先づさういふものであらうと思ふ。シルレルの言ふよりもラインの言ふは一步進んで居る。シルレルは勞働者貧民の居る所に國立の幼稚園を立つべきものであると云ふのである。ラインはモツと大袈裟にして居るのである。私の知つて居る幼稚園の立場に關する議論としては先づそれ位にして置きます。

これから私は獨逸佛蘭西に於て見た事を申しまして幼稚園に如何なる事を爲して居るかと云ふことを二三申します。獨逸には公立の幼稚園は一もでさいませぬ、悉く私立である。殊に都會に見るばかりで村落には殆んどない。フレーベルは幼稚園

の元祖もとそであり乍ら又議論ろんを充分じゅうぶん盡つくくして居るが、  
獨逸どいつには實際じつざい發達はつたつせぬ。私が見ても佛蘭西ふらんすの方が  
遙はるか盛さかんである。英吉利いぎりすには行つたけれども短日  
月みづひで様子を見ることが出来できませぬでした。亞米利  
加あめりかは行ゆませぬから、何なんとも申まをされません。伯林  
の幼稚園えいごえんで種々しゆくの研究けんきうをして居る、ベストロッツチ、  
フレーベルハウスと云ふ所で赤ん坊あかごを預かる所も  
ある。教育けいよう及び家事かじの練習れんしよして私立師範學校しりつしはんがくの様  
なものもある、又寄宿舎またきしゆくしゃもあります、幼稚園は二  
歳半さいはんから五歳さいの子供こどもを保育ほいくするのである。大体五  
歳と極めたので五歳四五ヶ月ごさいごよげつでも五歳と見る、  
それが幼稚園、それから中間組ちゅうかんぐみと云ふを置いて、  
居る。五歳半から六歳までの子供を育てるのであ  
つて、其處で幼稚園から小學校せうがくに行く移りがけの  
際さいを餘り差ちがひのない様にしやうとするのである。

幼稚園は母はは的てきの愛あいが多い、小學校せうがくに行くゆと嚴格げんかくに  
なる。其そのかわりが一足飛びであるからと云ふので  
中間組ちゅうかんぐみと云ふを置いて居る。又そこに小學校の初  
等級ちとうきうを二組置いて居る。それも今云ふた考へで幼  
稚園えいぜんと小學校の聯絡れんらくを宜くしやうと云ふ考へから  
起つて居るのである。其他に幼稚園として研究し  
て居ることは種々あるが、著しく感じたは中間組  
であります。後で佛蘭西の事を云ひます時に御比  
較かくを願ねがひます。伯林で重おもなものはいふもの  
であります。  
佛蘭西はドウ云ふ事を幼稚園でやつて居ると云ふ  
に佛蘭西の歴史れきしに依りますと佛蘭西で幼稚園に相  
應おほする者をレコルマテルナルレコルマテルナル（母學校）と云ひます  
が其起源そのきげんはフレーベル以前にあるやうであるがこ  
ゝに詳説せうせつする必要ひつえうを見ませぬ。其の母學校でやつ

て居りますのは三歳から六歳までの子供を收容して居りまして、種々細い規程を言へば一校兒童百五十人を越へぬとか、保姆は年齢二十五歳以上たるを要すると云ふ事があります。其の開校して居る間は午前六時頃から開く事もあるが大抵七時頃から夕方七時まで開いて居る。其の間子供を預つて居ります。食事も學校でつくり或は辨當を持つて來るもある、父なり母が連れて歸る義務がある。休みもイースターの祭一週間と八月中二週間を除く他は休みはない。日曜日は休みである。それは下層の人民即ち勞働者の子供が多いから、學校は休んでも勞働者は勞働するから、それに學校を閉ちて居ては子供が惡影響を受けるから休みを少くした所以である。時間の長いも其の譯であります。其上に六歳から上の兒童級と云ふものがあ

るが、それは母學校と小學校の中間で幼稚園に附屬して居るのである。幼稚園に附屬して居るが全體に多い。小學校の下級を幼稚園の上に喰つ附けて置くのである其他巴里では十一ばかりの兒童學校とでも譯しませうか、兒童學校と云ふがあつてこれも五歳から八歳位の子供を保育をして居る。幼稚園の一番高いものと小學校の低いものとを結合して成り立つて居る母親風の愛育を受けて居た幼稚園から嚴格な小學校の教育を受ける間の調和が六ヶしい、其の移り際の爲めに之も設けて居るのである、先きに申した伯林のベスタロッツチーフレーベルハウスの中間組も其の通りで、幼稚園から小學校に行く間の育成に注意して居るのであります。

序でに言つて置きますが、佛蘭西は幼稚園が盛ん

で千八百九十九年に巴里ばかりでも幼稚園の数が百五十九あり。幼稚園生徒が二万九千五百三十九人ある。シルレルは佛蘭西を學ぶべしとして獨逸の欠點を擧げて居りますが、佛國都會の工業地方には幼稚園を必要として立てゝ居る。一万二千以上の所は強制的に立てる様になつて居る。國立で佛蘭西はドン／＼立てゝ居るのであります。之が獨逸にはない。能く人が獨逸の幼稚園は下層人民の子供を收容してやつて居ると云ふが、私の見たところではさういふ事はない。幼稚園は少い。佛蘭西は非常に完備して居る。然らば保育の仕方はドウであるかと云へばこれは獨逸の方が旨い。佛蘭西のを二三見たけれども保育の仕方に於ては感服しないのであります。私は澤山は見ぬがこゝの幼稚園を二三度參觀したがそれより或はマツイかと

も思ふ。佛蘭西は幼稚園の子供に圖書を書かせる繪を畫くは物を精密に觀察し美を感じるると云ふもので繪を畫かせるが、其行り方も教へ方としては詰まらぬ。干渉の仕方も佛蘭西はより多く干渉し獨逸は自然的である。さういふ事を言つても一々細かい事を言はねばならぬのであります、今は極く大体であります。

今日申したは極めて簡單な事であつて、幼稚園に對して申したことは幼稚園の位置は學者が如何に考へるか、幼稚園に如何なる事を務めて居るかといふことの考へを申したのであります、尙ほ附添へて言へばクリツペン即ち幼兒保護所或は孩兒保護所と云ひませうか、それは幼稚園に行くまでの子供、生れて間のない子供これは慈善事業、社會問題の一部として獨逸に行はれて居る、佛國で



は生れて二ヶ月以上の子供を預る、ベスタロツチ、フレベルハウスでは生れて六週間以上三歳になるまで預つて、二十片此方で言へば十錢で預かる、一週間ならば一マルク五十錢である人民……下層の人民がドウしてこの金を出すと言はるゝか知らぬが。向うで物價の比較上一日二十片一週一馬克は高い金額でない、籠に入れて置き泣く兒を揺してもりし又牛乳を飲ませオシメも換へてやる、少し大い子供には部屋で玩具を持たせて遊ばせて居る、佛蘭西でも獨逸でも同じにやつて居る、日本では斯ういふのを見ませぬが、或は斯ういふ事が必要であらうか貴方がたの御研究になつて居る所からドウ云ふものでありますか御參考に申して置きます。簡單な話で纏まらぬ話でありました。



雜



録

五十四

鹽津みやげ (その三)

和歌子

●八月のある夕、をばさんが自身の單衣を疊んで居るのを見て、ふみ子(三年二ヶ月)は其自分のと違つて紐のついて居ないことに氣が付き、曰く「アタシモオキナツタラ紐ノツイテナイノキマスワ」と、をばさん「エーソーデスチ、大キクナツタラヲバサンノミタヨーナキモノヲキナサイ」ふみ子又「ヲバサンガ小ソナツタラ紐ノツイタノキルノ

「をばさん答へて曰く「ラバサンハモ一小サクナリマセンアンタハダン」大キクナルノデス」と、なほ大人は幼児にかへらぬといふ事を説明したけれども、まだふみ子の心の底には小が大となるに對して大が小となるものゝやうに疑問があるらしい。一体ふみ子は鋭敏に反對の側を考へるので、「アンタハ小サイカラ」と言ふと「大キクナツタラハ？」と問ふ。「アソコヘユクトアマリ暑いカラ云々」と言ふと「涼シカツタラハ？」と問ひ返す類で、反對の場合には如何にするかといふやうな事を必ず問ふ。

●又八月のある日、清子（七年九月）千代子（六年六月）英夫（四年二月）の外に、いつもは家に残して行くきみ子（二年六月）をも連れて海水浴に行く。さて皆で海水中にはいつた處、きみ子

は生後ばかりで海水に浴する事とて、抱かれながらチャブ／＼と言つては兩手で海面を打ち大喜である、家に歸つてから阿母さんに「キミドコヘイテキタノ」と問はれて「タインタタンタ」とくり返す、此人には今の處大海原も町の湯屋も皆等しくタンタ（方言俗湯の事）なので、さて／＼罪のないもゝある。

清子は何でもきれいなとか立派とかいふ事を、金蘭緞子の様なと形容する癖があるので、此日も濱で壯快に大浪小浪の寄せるのを見て、子供ながらに美に打たれたといふ顔付で「アレ／＼キレイナ浪キランドンズミタイナ！」

●又八月のある日、清子（尋常小學二年生）千代子（同一年生）の二兒は習字をする。一兒が書く時一兒を傍に置くと、實に遠慮會釋なく縦横無盡に

批評する。それが又中々よく當つた事を言ふ。千代子はまだ片假名の一部しか書けぬので、清子の書く平假名や漢字を見て感心して、見入つて居るのが常であるが。時にはふと「ソシナ字テナイワ、ソシナサテユー字ナイワ」など、我知らぬ字を見て鎗横を入れる。此日可笑しかつたのは、千代子にキミと書けるかと言つた處が、先生、キの字は書けたがミは書けぬ。「アタシシランエ」と言ふことと思へば「ホンナラキニチヨボウトカ」とたづねる。「キニチヨボヲウツタラギト言フノデミト言フ字ハ別ニアル」と言つた處が「フーン、ホンナラキニ。カコカ」と、は行には濁點も半濁點もうつべき事を知る彼れは之をキにまで應用したので。

●清子がはる／＼京都から携へ來つた國語教科書

を取り出してサツサと讀む時には千代子もきつと自分のを出して、われ劣らじと聲張り上げる。處が清子には、太郎がどうしたとか、お花がこうしたとか、多少複雑な事が書いてあるのにも拘らず、千代子にはフエ、タイコ、ユミトヤ、などゝ至極簡短な事しか書いてない。そこで双方正しく讀み出して二三分もすると、千代子の方がきつと、自分の本の畫を見ながら之を複雑に、たとへば「フエヲフイテタイコヲタ、キマシタ」とか、「コ、ニユミトヤヲカイテアリマス」とか、自己流に付け加へて讀むのが例で、すると弟の英夫も何か讀みたくなるが、まだ字といふものは一字も讀めぬ、しかたなしに自分の畫を書く帳を持つて來て、之に相應した事を作り出して本を讀む調子に聲高く讀むのも亦例である、つまり清子は字を

讀む、千代子は字と書を讀む、英夫は書を讀むといふ事になるので、之をだまつて聽いて居るのは中々おもしろい、時には三兒が一生懸命に讀んで居る間にをばさんが、御祖母さんや阿父さんや阿母さんに注進して、皆でかの讀聲を聽いて笑ふ事がある。

●又八月のある夕方、をばさんは清子千代子英夫ふみ子の四兒を連れて家の後の山に上る。小さな足が一生懸命に運ばれて頂上に達した時の愉快さは漸く西に暮れて一分々々に赤く大きくなつて行く、前なる海原は鏡のやうに見下される、誠に壯快な景色で小さい人達さへ此廣大な自然の美に感じたりしい顔付。かねてをばさんが此兒達に雲の美を知らしめんことを望み常に指示して其美を語つて居る結果、今夕は子供の方から言ひ出して

「アソコハ桃色」「アソコハ鼠色」など、楓のやうな手で大空を指しては語り合つて居る「オチントリサマ大キーノマー」「アノ赤イノ」などと太陽の美觀をも語つて居る。遂に清子の言ふ「アンナエー色ノ紙ヲホシーナー」と、子供の目に最も華やかに美はしく見えるべき雲の部分の指しつゝ。

さて何時の間にかまんまるい御月様が後に上つていらしたのを第一に發見したのが千代子、忽ち「大キナ御月サンー オー月サーマエーライナ、オーヒーサマーノ兄弟デー」と發聲する。一同之に合唱する。之が唱歌のはじまりで桃太郎やら水鐵砲やら色々歌ふ。君が代をと清子の發起に、即ち一同月に面して整列し謹んで頌する。山、月、子供、君が代何といふ平和な時ぞ。歸途には一同花のいろ／＼を小さい手に餘るまで摘みため、をば

さんの脊に在るふみ子にも三兒から贈る、花を愛し人を愛して幼児達が山道を歩いて居る様は一の邪念なき自然の人と言はうか。まるで天便のやうと言はうか。

きつす

や、て、

接吻は西洋に於ける一の禮儀慣例として廣く行はるゝは人の知る所なり、近時一米人之につきて記述せるを見たり。即其の太要を記す。敢て徒らに「ハイカラ」風を吹かさんとあらず。

接吻は疑ひもなく、家族的親愛を表明する最初のものの一にして、夫婦親子が之を以て其の感情を漏らす天然の手段なり。吾人は實に彼の禽獸に

五十八

於て此の本能を有するを見るなり。

接吻は國によりて稍趣きを異にす。佛蘭西に於ては頬部に限り、主として一家族中の男子の間に或は親友の間に差別なく交換せられ。伊太利も稍之に類す。英米に在つては男女の別なく之を施すが故に往々にして亂雜の譏を免れず。獨乙に於ては男性の間にのみ行はるゝを普通とす。

そも接吻の事たる人性本能より出で自然に起りたるものにして、漸々社會文化の進歩と共に其の使用を家族以外に及ぼし、男子間に限りて禮儀上之を用ひ、以て尊重崇敬平和好意の情を表はすに至り、遂に今日に進みしなり。

古くはベルシヤのサイラス王も其の叔父を尊敬せんとて之をなしたり。又アラビヤ人は古來今日に至るも尙髻の端を接吻する舊慣あり。英國に於

ては此の風百年以前より大に行はれ、他家を訪問するものは必ず其の家族中の總ての女性に接吻するに至れり、而して今尚或る田舎の地方に此の餘習を存すと云ふ。

古代基督教徒の間にも常に行はれたりしなり。

彼のセント、ポールがコリントに於ける信徒に送りたる書には、「爾來神聖なるキツスを以て相互に祝すべし」とあり。此の習慣は僧徒より教會一般に及び、男子は男子と、女子は女子との間に之を交換せり。羅馬教會に於ても新改宗者ある毎に之に接吻を施こし、殊に聖餐執行の時に於ては其の交換甚だ雜駁にして弊なきにしもあらざりしかば、後には唯だ聖式を施行する僧徒間のみに限り一般の唇に接するには十字架形の物を以てなすこととし、爲めに傳染病感染の患を減少せり。

神及び皇帝に對しては 各自自身の手で接吻す  
初羅馬帝は朝臣をして其の手に接吻せしめしが  
餘り昵近に過ぐると思ひてや、後に至り唯其の衣服の縁を恭しく接吻するを容し、更に變して臣下は各自其の手に接吻し、帝の玉座に向ひて拜禮を施すに至りしなり。惟ふにこれ疾病傳染の虞あると共に、其の威嚴を保たんが爲め、及び廷臣の危険なる陰謀を恐れたるならん。

接吻禮の由來實に此の如し。事頗る簡單にしてしかも能く情愛を發表して餘りなし、されど其の弊亦決して少なからず。あゝ此のやさしき禮法習慣の將來は如何あらん。嚴格なる道德家と優美なる禮儀家との協商それ如何。

左の日記を讀みて

天骨老人

わが友某は悲觀的人なり、爲めに一たびは狂  
 ひて果ては遠く都を離れし、銚子の海岸に養痾の  
 人となり、漸く癒ゆるに至りては、身を基督教界  
 に投じて、頗る謹直の人となりしが、尙ほも  
 教會の生活に身心の満足を得ずやありけむ、遂に  
 其れより轉じて商業界に入りぬ、其の間僅かに七  
 八年の短き間ながら、其の變轉せし迹の或は迅雷  
 の如く、或は疾風の如く、或は獅子の狂ふが如く  
 或は象の靜かなるが如く殆んど某の心事は捕捉す  
 べからざるものあり、飄逸なるが如く、謹直なる  
 が如き、某は全く常識の人にあらざるやの感ある  
 なり、されども其の心の底には何物が靈活なる流  
 れの滾々と盡さざるものありしが如きは、わが友

の間にありては異彩を帶べるもの、一人なりき。

偶々明治卅三年某が誌せし日記を取り出して讀  
 ひ、元より飄逸なる某の事として、全巻を通じて誌  
 せるものにはあらずして、斷片零碎のものなり、  
 されば詳しき出來事を書きたるものにはあざれ  
 ども、其が一節／＼の間にはまたゆかしき情思の  
 偲ばるゝあるなり、

思ふに日誌は一家の歴史、一身の歴史、有聲の  
 紀念、まして今活ける某の身の上の事にしあれば  
 そが十年廿年の後にありて某の身の幾變化の後打  
 ち顧みたらんには如何に興多からん、日誌は譬  
 醒社の『吾が家の歴史』の上に描かれたるもの、  
 一月三日、得たる思想と云へる項下に「夫の死  
 いたる妻の悲哀の情」これ某が常に悲哀的人た  
 るが故に夫の死せる妻の悲哀につきて何事かを感

想に浮べたるものゝ如し、あとの事かきあらねば  
え知らざれど、

全月四日同し項下に「女は實に謹むべき友なり」とあり、これは如何なる觀察より下したる事かはよく知られされども、友として交はるべきものなるも、謹まざれば誤りあらんと會得せしむにか、明かならぬうちにもこよなき味の含まるゝが如く見ゆめり、

全月七日全し項下に「人は Practical life and Poetical life を二分したる生活を爲すべし」とあり、これは詩的生活と事實的生活の間に處すべしとの意義明かにせられて面白し、大凡そ今の多くの人の生活只事實的即ち現實の境をのみ如何せんと焦りて理想の境に如何に遊ばんやとの思考少さに感しての言としてわれもいたく同情の念を凝ぐるもの

なり、某の今日にありて、商業界の人となりて、外國との取引き事務に忙はしく、朝に夕にデスクの前に座し、タイプライター、に倚りつゝ、閑あれば、美學の研究に餘念なきを證し居るを見るなり、全月九日の全し項下に「今の世に正しき道行はつまづき易し」とあり、これは少しく、語の足らざるやを感ず、世路難を言ひしものか、當世流の人の如くにならんとする某の意か、されとも短きうちに予の感せるところを以てせば、正し人は今の世に棄てらるが如きとの淺ましく悲しきを言ひ出でたるものならん、悲觀的人には珍らしきとならねば、

全月十六日の全し項下に「金こそ人の品を下すものなれ」とこれも金と云ふものの一面の觀察を下し得たるものとして貴き言語なりと知るなり、



生命よりも金の貴きと説く人には味はしむべきなり、されとも黄金の事其の使用の心ばえより云はじ、黄金罪なし、持つ人の心によりて禍福はあるなれ、今の世の人、黄金もつ心ばえのきたなき、禍を黄金の上に及ぼす、あはれなるともかな、  
 全月十九日全し項下に「敵は最も有益なる朋なり」これもまた某が身にとりて親しく感したるものなるを明かに知らるゝの言なり蛇足なくも明かなるべし、  
 全月廿日全し項下に「人は平和を受けるが爲めに此の世に生る」と、よき處世の心得なるべし、謂ふにテニソンの云ひけん如く、「吾人の境界は宛然暗夜に燈火を求めて啼く嬰兒の如し、啼くより外、言語の出すべきなし」との如くに、われらの世に處する上には種々の事情、境遇の如何に複

雑纏綿して、燈火だになき間にさまよへるか、されば若し一たび何等かの手段によりて、身心の平和たに得られなばいかに嬉しからん、如何に樂しからん、樂園はこゝに現はれん、某の言は永く朽ちざるべきなり、  
 全月廿七日全し項下に「無念無想、汝は學校を出て、後考へよ」學生としての某がかく眞面に言ひ出てたるは愛すべきなり、  
 全月廿八日全し項下に「汝は學力を養成する外に何事も望む勿れ」これもまた某が、野心満々たる時代にありて反省的の語として注意すべきものなり、青年時代にありては燃ゆるが如き功名心は實に全身を支配し、才能にまかせて、遂にはわたられしき青年の花の時代も實を結ばずして終るゝあり、心せざるべからざるは學生の時代に於ける

用意なり、某はこゝに頗ぶる自覺せしものと云ふを得るなり、

某はかくして英文學の研究に入りて致々として勉め、吃々として勵みぬ、時に或は抑ゆべからざる希望心の爲めに、時に無暴なる事すらありて、友の注意を受けたるをあり、某はそを直ちに快よく容れて必ず反省するが常なりき、自己の無遠慮なるを耻ぢ、自己のやゝ不遜なる爲めに多くの人に容られざるを嘆じたるを屢々なり、其の結果は遂にまた悲觀の人となり來れるなりき

二月一日全じ項下に「人世最大の苦は死と其の後の苦として宇宙の苦は死てふものなり」と十九歳の某はかくの如くにして益本能の厭世思想を深ふしぬ、

あゝかくして一種の悲觀の人となりし某の其の

後の傾向如何予はこれより語らざるべし、某に對してこゝに之をいふは失禮なればなり、されども悲觀的人より流れ出でし某の言葉のうちわれは棄てがたき、意味ある文字なりとして誌しつくるを禁ぜざるなり、

思へ日誌とはよき鏡なり、若し月々の出來事、得たる思想、かりそめにも虚飾なく誌しゆかば、如何にわれとわが心の養ひの糧となるべきか、

わが友某はふかき思想の人となりて、今もなほ獨り居るなり、世に處するを幾浮沈を経て、尙ほ猛然として淨き靈液を吸ひつゝ、望みの岸を仰ぎつゝ活動しつゝあるなり、某は遂に如何の人となりゆくべきか、其の悲觀の深きかれ、樂觀を見出したる某の身の上こそげにわが胸に浮び出さるゝとの多きをよるこぶ、



●女子高等師範學校 先月十日附屬幼稚園にて  
は、秋季父兄懇話會を開きしが、兼ねて運動會を  
開きぬ 先づ、會場は、白黒の幕を引き回し、  
各國の國旗は天空高く翻へりて勇ましく、午前九  
時といふ頃、幼兒等は 一同會場に立ち並びた  
り。やがて運動は始まりぬ、プログラムは次に  
一唱歌(菊) 全 體  
一同(桃太郎さん) 全  
一遊戲(わくわく) 二の組  
一全(てふく)、鳩(ぼ) 一、三ノ組  
一全(すいめ) 分 室  
一徒歩競走 一ノ組

一か迎競走 二ノ組  
一豆囊ひろひ 三ノ組  
一二人三脚 分 室  
一徒歩競走 全  
一色合せ競走 一ノ組  
一競馬 二ノ組  
一旗とり 全  
一馬車競走 分 室  
一看護競走 一ノ組  
一二人三脚 全  
一綱引 一、二の組  
一全上 分 室  
一遊戲(かごめ) 三の組  
一全(ベビードダンス) 一の組  
一全(蓮の花) 全 體  
一唱歌(君か代) 全  
一遊戲(うづまさ) 全

▲先月十四日全校如蘭會總會相關き、午前九時

より、午後四時まで、開會各部の演習ありたり▲  
 全廿八日には附屬高等女學校演習會あり、ピアノ  
 に獨唱に說話等各科とも成績甚だよろしく年々進  
 歩の跡著るしき様覺えたり。

### ●公益音樂會

帝國教育會附屬圖書館擴張費に

充てんがため、知名の紳士淑女發起となり、去月  
 廿八、九の兩日上野音樂學校に開き全日全會は、  
 二日とも非常の盛會にて、殊に二十九日には、ユ  
 ンケル、ケーベルを始め幸田姉妹其他斯道の西洋  
 音樂大家の顔揃ひとて、集まるもの非常に多く、  
 爲めに、席に付くことも、身動さもならぬ窮屈を  
 感じたり、由來狹隘なる音樂堂のことなり、豫じ  
 め人數を計りて入れられたきものなり。

### ●新年歌御會始御題

明治三十七年一月宮中歌御會始の御題は「嚴上松」  
 と御治定の旨仰出されたり詠進期限は明年一月十  
 日限り書式は例年の通り用紙は檀紙、奉書、杉原  
 紙、美濃紙を用ふ可く尙ほ一人一首に限るとの事  
 なり又封筒には「宮内省御歌所御中詠進在中」と認  
 む可き由

### 整 詠 草

但五少折

御 題	名 上
、	
、	
、	
、	
、	
、	
、	
、	
、	
、	

裏面は某府縣下某國某市町住

華土族又は平民

苗 字 名

官位勲等を有する者は苗字の上に記入すべし

### ●本會忘年會

本月十二日の土曜日には、華族

女學校に於て、本會例會を開く由なるが、今日は特に會員相互の親睦を計り、舊情を温めんがため忘年の懇親會を兼ねて開會し、種々興味ある會合をなさん筈なりと

### 兵庫縣通信

在攝津魚崎通信員 平岩 學 洋

#### ●大演習

此度攝播但の三州の野に於て舉行相成候大演習も間近相成候に付常廳又は警察官吏其の他其の局に當り居られ候人々或は地方軍人會の夫々の方は衛生上其の他種々の準備のため繁忙を極め居られ候

#### ●神戸高等商業學校開校式及運動會

神戸高等商業學校開校式及運動會 官立神戸高等商業學校にては十月十五日開校式を舉行致され候當校は明治三十三年より工事に着手し今春教室其の他の新築成り諸般の準備整頓致し候ため

豫科一年の授業を開始したる由に候現在生徒數百七十二名の由に候尙當日參列員は前菊地文相眞野普通學務局長神田乃武男服部本縣知事を始として四百名の多きに達し候正午十分過ぎ式終り一時二十五分頃より當校運動場に於て第一回陸上運動會を舉行さすがに高商だけあり候て運動の種類十二種皆價値ありて中々盛會にあり候又當校位置は高所(市街の東北)にありて前には茅停の海全体を眺め背には有名なる摩耶山を控へ頗る好景に候

●神戸養老院の設立 同院は頼むべき子孫なく依るべき親族縁者なく自ら生計を營む能はざる老人を扶助する目的にて今回神戸市下山手通四丁目に設立せられ候其の舉を賛成し續々定期寄附を申込者之れあり候由

#### ●家事科講習會

兼て御報導申上置候御影女子

修藝學校にては今回家庭に必須なる技藝知能を授け以て家政的知識の發達を計らん目的にて家事科講習なるものを十月廿五日より開設致され候尙授業時間は午前八時より午後四時迄にて毎日曜日十二回を以て結了する筈に候由教科目は家政學作法刺繡刺煮の四科に候余は十一月一日少しの閑暇を得候に付當講習も實地に參觀することを得候當校長大原文子氏は育兒法の一部として初生兒に就いて丁寧な嬰兒母の胎内より出て外界の空氣に接する影響、全始めて湯を嬰兒につかはする事に就の注意湯桶の作り方「ふしめ」の取扱方及其の作り方、はだ着に作る布類の選擇及作り方つけ「ヒモ」をつける位置衣服の數の必要衣服の濡るゝを防ぐ「フトン」の作方次に嬰兒の食物即ち乳につき吞まする數「マクリ」「ゴコー」を吞す必要なこと

と、母より始めて出る乳は初生兒の或る一種の毒(俗に嬰兒より出づる黒き乳の如きもの)を消す力を有する事、人の乳汁はすべからず、牛乳「コンデンスミルク」等の使用法等に就て詳細に大凡一時半に渡り講義せられ候校長丈あり候て聞て利益を得る所多少あり候次に東京女子職業學校出身村上たつの子氏の刺繡科を參觀仕り候當日は開會日淺く且つ刺繡等に素養のなき者もある様子にて多數は講師の手をからざれば出來ざるもの多く會員多數のため村上氏の教授の困難思ひやられ候當講習員は三十三名の由其の内には小學校裁縫專科教員又は當校生徒及び當町の諸令嬢妻君等の交合に候午後は神戸市榎田吉次郎氏の日本料理及西洋料理の割烹の授業之れあるとの事に候へ共余は公務の都合上遺憾ながら參觀を得ず候尙今一つ遺憾

なることは校長大原氏他出の都合と見へて親しく  
面談種々婦人會の問題に就て質問談合を試みざる  
は大に遺憾の事に有り候尙は當講習の詳細は規則  
書御送附仕り候間宜敷願上候

●魚崎裁縫學校及魚崎尋常高等小學校大運動  
會 同校にては十一月八日大運動會舉行郡役所

より友末氏出張來賓には御影師範校の諸士並に父  
兄等多數之れあり候殊に師範學校よりの來賓は大  
多數にして當日の花に之れあり候兼て御報導申上  
げ置さ候通り本縣下は先づ一体に遊戲思想相當に  
發達致しかり候へば演技者は勿論見物人も非常に  
熱心に終日首を長くして參觀致し居り候別紙演技  
番組御送附申上候以上(十一月九日通信)

會 報

幹 事 會

十一月廿五日午後二時半より女子高等師範學校附  
屬幼稚園内に於て開會せり出席者は中村主幹松村  
雨森、田中、武井、和田、關、野口、下田幹事並に東基  
吉氏にして次回常會に付きて協議をなし左の如  
く決したり

一、十二月十二日第二土曜日午後一時半華族女學  
校幼稚園に於て開き、會員の忘年會を兼ねること  
但し當日の會費として一人に付拾錢づゝを募集する  
こと

入 會

麴町區富士見町五丁目十一番地  
麴町區富士見小學校

青 江 さ く  
三 島 つ る

和歌山縣西牟婁郡鮎川村  
女子高等師範學校生徒

全

麴町區中六番町十番地

神戸市奥平野村三四七

改姓

轉居

和歌山市北仲間町三番地へ

宇都宮市塙田町一七七へ

高知縣師範學校へ

香川縣仲多度郡善通寺町花藏院内六二三

淺草區東三筋町五八へ

和歌山縣海草郡宮村秋月

右山下つや紹介

寺本又齋

船本やすえ

石津まつよ

村田きぬ

右安東てい紹介

湯河さだ

右大橋いね紹介

高野わさ

右池田その紹介

小笠原茂穂

改避佐

中島雪枝

藤澤皐月

松岡久すや

勝田暢子

大山千代

黒田織衛

奥野まさ

關しん

自明治三十六年十一月二十二日會費領收

六〇圓

三六、一一—三七、四

三五、五—三六、五

五〇

二〇

二〇〇

四〇

一〇〇

一〇〇

二〇

一〇〇

二〇〇

一六〇

四〇

四〇

六〇

一五〇

一一〇

一二〇

一〇〇

一〇〇

一〇〇

一〇〇

五〇

七〇

一〇〇

六〇

三五、七—三五、一一

三六、七—三六、八

三五、四—三六、一一

三六、一〇—三七、一

三六、五—三七、二

三六、一—三六、一〇

三六、一〇—三六、一一

三五、六—三六、三

三五、三—三六、一〇

三六、九—三七、一二

三六、七—三六、一〇

三六、七—三六、一〇

三六、五—三六、一〇

三五、五—三六、七

三六、五—三七、三

三六、四—三七、四

三六、九—三七、六

三六、一—三六、一〇

三六、一〇—三七、七

三六、八—三六、一二

三六、六—三六、一二

三六、七—三七、四

三六、一〇—三七、三

井口よね

堀越源次郎

大友のぶ

中島雪枝

御厨守忠

尾崎勝己

三宅民枝

山高幾之丞

藤堂忠次郎

島蘭つね

山田かめ

小澤さき

小田しる

富田八千代

伊藤とよ

太田ため

馬場たき

伊庭なつ

野村ぎん

岡田折枝

森乙女

下瀬たつの

吉澤とも



諸岡さよ  
島つね  
岡田みつ  
依岡あい  
寺本又壽  
坂井みどり  
橋本たへ  
野秋きよ  
重田ふじ  
平瀬さだ  
松岡さち  
武井とめ  
高木うめ  
林千代  
小笠原しげほ  
小泉千代  
岡澤やへ  
外山一茂  
村川あい  
柴田かつ  
藍森よしえ  
篠原しき  
有賀貞

三〇	三六、六——三六、八
四〇	三六、九——三六、一二
一〇	三六、一一
一〇	三六、一一
一〇	三六、一一
一〇	三六、一一
一〇	三六、一一
一〇	三六、一一
一〇	三六、一一
一〇	三六、一一
一〇	三六、一一
一〇	三六、一一
一〇	三六、一一
五〇	三六、六——三六、一〇
三〇	三六、八——三六、一〇
四〇	三六、七——三六、一〇
六〇	三六、五——三六、一〇
四〇	三六、七——三六、一〇
三〇	三六、八——三六、一〇
二〇	三六、九——三六、一〇
二〇	三六、九——三六、一〇

山田熊之進  
小島はま  
岩田ゆき  
加藤きつ  
根本まさる  
奈良あい  
内田たね  
益田一枝  
藤岡とき  
藤谷いわ  
安藤さだ  
安東てい  
木村とら  
平川よし  
柏木ふさ  
佐々くき  
岡田ちよ  
佐藤みさほ  
神通せき  
永田けい  
前田捨松  
野尻てつ  
小谷野千代

二〇	六〇	六〇	四〇	三〇	九〇	四〇	四〇	四〇	四〇	二〇	七〇	二五〇	七〇	六〇	二〇	一九〇	一九〇	一三〇	四〇	二〇	一〇〇	一一〇	一九〇
三六、九—三六、一〇	三六、五—三六、二〇	三六、五—三六、一〇	三六、四—三六、一〇	三六、八—三六、一〇	三六、二—三六、一〇	三六、七—三六、一〇	三六、七—三六、一〇	三六、七—三六、一〇	三六、九—三六、一〇	三六、四—三六、一〇	三四、一〇—三六、一〇	三六、四—三六、一〇	三六、五—三六、一〇	三六、一〇—三六、一一	三五、四—三六、一〇	三五、四—三六、一〇	三五、一〇—三六、一〇	三六、七—三六、一〇	三六、九—三六、一〇	三六、一—三六、一〇	三五、一—三六、一〇	三五、四—三六、一〇	

江藤みほ	廣瀬みつ	築山督清	妹尾明	實しけ	山崎彦八	伊藤貞勝	佐久間えね	永田らく	佐々木まさみ	田村壽美	水口みつ	土川五郎	岡本ちか	三好すず	高橋しげ	田中かま	爪生しげ	金子きた	小谷野かね	小出雪吉	龜岡のぶ	大和田りょう
------	------	------	-----	-----	------	------	-------	------	--------	------	------	------	------	------	------	------	------	------	-------	------	------	--------

四〇	四〇	一六〇	一五〇	四〇	八〇	二〇	四〇	四〇	一四〇	四〇	九〇	四〇	二〇	三四〇	四〇	一九〇	五〇	四〇	五〇	三〇	九〇	一六〇	六〇
三六、七—三六、一〇	三六、七—三六、一〇	三五、七—三六、一〇	三五、八—三六、一〇	三六、七—三六、一〇	三六、三—三六、一〇	三六、九—三六、一〇	三六、七—三六、一〇	三六、七—三六、一〇	三五、九—三六、一〇	三六、七—三六、一〇	三六、二—三六、一〇	三六、七—三六、一〇	三六、九—三六、一〇	三四、一—三六、一〇	三六、七—三六、一〇	三五、四—三六、一〇	三六、六—三六、一〇	三六、七—三六、一〇	三六、六—三六、一〇	三六、八—三六、一〇	三六、二—三六、一〇	三五、七—三六、一〇	三六、五—三六、一〇

深江とき	山田やな	川島莊一郎	近木とし	野澤あい	寺尾きく	伊藤其	北村きた	星つね	柳井つる	玉尾こま	上遠野あい	加納てる	榊山つわ	淺井はつ	安藤ゆき	藤村いと	古市幸	佐藤梅	大竹みさほ	前野とき	羽田ゆき	橋本はな
------	------	-------	------	------	------	-----	------	-----	------	------	-------	------	------	------	------	------	-----	-----	-------	------	------	------

三二〇	三三、四——三六、一〇
三〇〇	三六、八——三六、一〇
四〇〇	三六、七——三六、一〇
六〇〇	三六、五——三六、一〇
五〇〇	三六、六——三六、一〇
一三〇〇	三五、一〇——三六、一〇
五〇〇	三五、一〇——三六、二
五〇〇	三六、一〇——三七、二
一〇〇	三六、一一
一〇〇	三六、一一
一〇〇	三六、一一
一〇〇	三六、一一
一〇〇	三六、六——三七、三
一二〇〇	三七、一——三七、三
六〇〇	三七、一——三七、六

廣 告

福井梧老と本會とは一切關係無之候  
に付き茲に廣告致し候

乙竹岩造	印東かめ	今井つな	永田かい	山田梅	長與のぶ	松山はま	福田米	石澤まつ	船木やす	村田きぬ	佐藤壽錫	山岡てる	太田とめ
------	------	------	------	-----	------	------	-----	------	------	------	------	------	------

市内會員諸君の會費は自今東京集金  
社に依託致し候間同集金人參上の節  
は無御懸念御渡し下され度く候  
明治三十六年十二月

フ レー ベ ル 會

會 計 係

女子高等師範學校教授 東 基 吉 著

# 幼稚園保育法

フロベール氏肖像及手技彩色圖形入り製本美麗

幼稚園教育のこと近來漸く盛なるに至りたりといへども悲しいかな之が原理方法等につきて詳細に記述したる書籍なきを以て日々斯業に従事せる保育者其人に於ても更に進んで研究發明の參考に資するものなく殊に新に斯道に従事せんと欲する人に於ては遂に以て保育の何たるを知るに由なく爲めに百事日新の時に當り幼稚園のみ遅々として獨り舊觀を改めざるが如き有様なるは實に我國教育界の一大恨事といふべきなり。

本書は著者が多年實際につきて研究推敲せられたる結果になりたるものにして先づ筆を一般教育より起して家庭教育學校教育を詳述し次いで幼稚園の必要保育の要旨保育の事項方法等其他一切幼稚園に關する實際の事項は勿論フロベールの傳記學說等に至るまで一々明瞭に記述して餘す所なく殊に附録として幼稚園の設備をも添えたれば何人も本書に由りて幼稚園の原理と實際とに通ずるを得べく幼稚園保育者は勿論小學校教師並びに特に家庭の教育に心を用ゐらるゝ人々に取りては必讀無二の良書といふべし。乞ふ續々御注文の榮を賜はらんことを

發行所

東京市京橋區南傳馬町二丁目五番地

目 黒 書 店

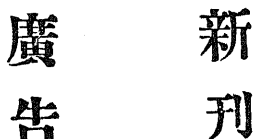
本月二十日發行

定價 七 拾 錢

郵稅 六 錢

郵税一冊に就き金四錢

行さるゝもの夥しと雖も、多く



及教授上一の間然する所なき未曾有の最良教科書と云ふも決して謬言におらざるべし

定價金四拾五錢  
郵稅金六錢

全一冊定價金貳拾五錢

郵稅金六錢

多き遊戯法を以てし何人

定價金拾貳錢  
郵兌金四錢  
第二編近刊

編輯したるものにして其

て各國語の發音をも併記

以上各重

迄名種

五圓以上五十圓迄  
十圓以上五十圓迄  
各各種種

金四圓以上其他

トロンホン等金貳拾圓

圓以上 橫笛金壹圓以上

用一紐扣三圓

拾銀以上至十圓迄 各種

六圓五十錢以上  
圓迄

ラジヨールツト其他各藥

(ヨキ號略信電)  
番九廿百五橋新話電

店器樂社商益共 區橋京市京東  
地番三十町川竹